
空中海賊物語り

楽しんでます

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空中海賊物語り

【Zコード】

N7166V

【作者名】

楽しんできます

【あらすじ】

人間界で育つた。兄妹が実は魔族として暮らす筈だった魔族として暮らして来た兄妹は人間界で暮らす筈だった……

主人公の兄妹の前に現れた。

冥王は一人に「君達、異世界に、トレードね」

と勝手に言い放つ

「「ハア！？」

と呆れる……その訳とは……

そして転生した世界で冒険者兼海賊をする事を決めた兄妹。

さあ大空へ旅立とう！

（注：第一作品と本作は基本的に、パラレルワールドです）

注：Gジェネの戦艦とロストユニアーバースの、ロストシップをネタで
出します。

表示ミスをお詫びいたします。

プロフィール（前書き）

妹キャラ設定に表示ミスがありましたので、修正しました。
兄妹キャラに設定を追加しました。

兄妹転生キャラ設定は、
サイバスター様に許可をいただきました。

プロフィール

アストリア・フェルト
(転生前:伊集院・総一郎)

年齢18才

髪型:金髪のショートカット

瞳:紫色

口調:僕

性格

穏やかでのんびり屋

趣味:昼寝と読書

魔力:EX

剣術技能:S

知識:A

魔法:火炎系

風系

ブラスト・ノヴァ

（ラングリッサーの魔法ノヴァのアレンジです）

特殊防御スキル

アースガズル（神々の砦）

魔剣：シュバルツァー

技能スキル

ゲート・オブ・バビロン

魔槍グラム・ザンバーメネシス改

（エアは英雄王が貸し済つた）

牙突

燕返し

必殺技

ダンシング・ナイトメア

（剣舞の様な斬撃の嵐）

ナイン・ライズ

(グラム・ザンバーメネシス改)

キャラ説明

神様の手違いで人間界に産まれた少年。

魔族に成つてものんびりとしている。

不幸属性カード

仲間を見つけるまで極貧生活

外見

(蒼ざめた月の光のアストリア)

サテラ・フェルト

(転生前:伊集院・真琴)

年齢:17才

髪型:赤毛のボーテール

瞳:紫色

口調:アタシ

性格

勝ち気だが面倒見が良い

趣味

魔法アイテムの精製

リアルモンハン

魔力：AAA

俊敏力：S

技量：EX

固定武装

蛇腹剣・ダンシング・スナイカー

スキル

固有結界無限の剣製

カラド・ボルグ？

ルール・ブレークー

エクスカリバー

魔法

雷撃系

凍り系

回復系

ドラグ・スレイブ

メテオ・ストライク

特殊スキル

トランザム（Gジェネ〇〇を参考）

レイ・ウイング（飛行魔法）

マジック・ミサイル（本人はファンネルと言っている）

キャラ紹介

色々と転生前の世界の事を考えているが前向きに頑張りつつと考えている
基本的にお節介。

外見

（鬼 王ラ スの魔人サテラ）

不幸属性カード

上級魔法や固有結界は天才的魔術師と弟子入りするまで封印します

（現在高い魔力に実力がついて行かない状態）

プロファイル（後書き）

プロローグ頑張って作ります。

プロローグ（前書き）

神様力ードはレフェル様に

ご許可をいただきました。

描寫を一部変更しました。

プロローグ

最初に驚いたのは、僕たちの頭の上や足元をボロボロの建物などが、浮かんでいた事だ。一瞬夢かと思ったが、すぐ現実と思い知らされた……

「あっ、夢じゃ無い」

妹よ兄のほっぺた……つねつて楽しいか……？

「痛いのは僕の方だよ真琴」

そう言つて妹を睨みつける……

その時誰かの気配を感じた奥に誰か居る。

「やあはじめまして、こんな夜遅くに『メンネ一人とも』

「「アンタ誰だ!!」」

そこには、ス○レイ○ーズの冥王フイ○リ○が18才位に成長した様な、少年が立っていた。

「人じや無いけど……指指さないで欲しいな……まあいいけど、僕は冥王だけど……此処は、この世と冥界の境田だよ」

「…? はい」

いきなり訳の分からぬ事を言つ少年。

「「人を可哀そうな目で見るな——つ——」」「

いきなり逆切れした、あつ……いきなり怒鳴りつけてくる。

遂にうちの妹が遂にキレた……

「「何よ、こんな夜更けに、しかも訳の分からぬ所に、寝間着のまま呼び出す何て、一体何様のつもりよ、恥を知りなさい……」」

あまりの怒りつぶりに……自称【冥王】は正座をしてくる。

しばらく放つておいつ……

妹は一度起つておいたら止まらないのだ。

妹の怒りは収まらず……最近のつづふんを此処で晴らすつもりしない……聞いていて僕が恐い位だ。

しかし話が進まないので、二人の間に割つて入る。

「そろそろ……いいか? 一人とも

「ハア、ハア、いいわよ兄ちゃん……」

「すみません……助かります」

僕としては、このまま見物をしていたかつたのだが……あまりの冥王の哀れっぷりに、同情したくなつた……

「よく落ち着いて聞いてください……実は貴方たちはこの世界の住人では在りません」

（はい……今なにをおしゃいました）

「貴方たちは異世界に転生してもらいます。」

僕たちの反論を待たずに、彼は話を進める。

「じつは貴方はこの世界ではなく、異世界の住人で魔族として生まれる筈でした……しかし僕のミスで、人間界に間違えて転生させてしましました……本当に御免なさい……」

魔族……間違いで人間に転生ね……

「……別に誤らなくとも……」

「怒らないで聞いて下さい……今から貴方を転生させます……」

「「それとこれとは別問題だ……」」

見事に声がハモる流石は兄妹だ。

「アンタねそれで、よく神様が勤まるわね……」

「僕も……上の神様達に散々に叱られました……何十億年以来の大不祥事だつて。」

まさか……何となく事情が分かつて来た……しかし先に妹が冥王に問い合わせる。

「「ビーしてくれんのよ、明日は正樹とデーターなのにてーー。」

「真琴落ち着け。」

とんだ不祥事だ……妹を何とかなだめる。

「僕も色々たいへんなんです、それに……これは既に決定事項なんです。」

「「いくら神様でも横暴だ裁判の神様に訴えてやるーー。」

神様でも……弁護士の神様や、陪審員があるはず……

「構わないけど時間がめちゃくちゃかかるよ。」

冥王は不適な笑みを浮かべてそう言つて来た。

「時間でどの位よ?」

「最初の裁判で千年かな?」

「「長ーー。」

何て……時間がかかるんだ……

「その疑問は分かるよ」

しかも心読んでるしーつ

「上の神様や裁判の神様とは、僕は話を着けました

「一応聞くけど……結果は。」

「時間の無駄だから、示談で一人と話しえてさ」

「示談でどうすればいいよんだよ……」

「賠償金とか？それとも……」

「えへやつぱり異世界にトレーデかな？」

「あのですね……今の野球界でも、ふりーえーじえんと制度位有るんですけど

「神様の世界にそんな制度はあつません。」

「「ハアー?」」

呆れた……散々呼び出した挙げ句いきなり転生しかも魔族……やつてられん……

「気持ちちは分かるよ、でもね君達と同じ様に呼び出した、魔族の兄妹さん達にも此処に来て貰つてゐから。」

え……魔族の兄妹が来ている……どういう事だ？

「実は… その兄妹はもう死んで… 来ちゃつたんだ」

オイ……まさか

「そのまさかさ…… その魔族の兄妹さん達が死んじやたから…… バレちゃったテへ」

「職務怠慢魔王——！」

「酷い……僕は神様だよ、死と再生の神様なんだよ、偉いんだよ、希少なんだよ、ステータスなんだよ！！」

つあ……逆ギレしてやがる。

「もういいわ、その兄妹さん達は何処に居るの？」

妹はけんなりしてそう聞いた。氣持ちは同じたよ。

「それじゃ此処に呼ぶね」

足元？の魔法陣が光たす

何故疑問形と言つと、いろんな物が浮いて、いるから、地面なのか空なのか判断が付かないからだ。

若い二人の男女が現れた、年齢は僕たちと同じ年位、男の子の方は金髪のショートカットで、紫色の瞳・服は白い貴族服を動きやすくした様なデザインだ、女の子の方は、赤毛のポーテール・瞳は紫

色・服は白いマントにインナースーツ姿だ。

彼らと田が合づ少女が頭を下げる。

「私達のせいで、」めんなさい。

「気にしないで、全部コイツが悪いんだからー。」

ビッシュと魔王に指を刺す。

「ほ、ほぐがー？」

「元はアンタが……原因なんだから責任を取りなさい……。」

魔王を除く全員がうんうんと頷く。

「じゃあ転生してくれるかな？」

「だが、断る……。」

「責任はアンタが一人で取りなさい……。」

「フフフ……と……なに……魔王様笑いをされているんですか？」

「何だったら……//ジンコやゾウリムシに転生する？」

「「異世界でOKです、ふるわー。」

「……正義は敗北した……」

「僕も鬼じゃないんだよ、転生する前に君たちの知識の交換を始めるね。」

知識の交換？

「お互い知らない世界に逝くんだ、通用しない知識をもつても、意味ないでしょ？」

「何か漢字が違う……まあ気にしたら切が無いし……まつ良いか……でも……お父さんや母さんは？」

いきなり自分の家族が他人なんかに変わったら……ショックで寝込むな……

「その事なら問題無いよ姿も能力そして記憶も交換するから、二人とも魔方陣の中に入つて大丈夫すぐ、終わるから。」

「えつ、記憶も入れ代わる……大丈夫なのか？」

「……かなり不安だな……」

不安はあるものの……魔方陣に入る、冥王は目を閉じて呪文を唱え始める。

意識が遠のいて……行く……しばらくしてから、妹の真琴に起される、目を開けると……さつきの女の子が心配そうに、見つめている。

「その声は真琴……でも姿は……」

「お兄ちゃんも私と同じ、ように入れ代わっているわ。」

辺りを見回すと僕たちと同じように、入れ代わった一人がいた。

「おー一人とも無事だつたんですね……良かつた。」

「所で自己紹介がまだだつたよね、アタシは真壁

「マコトさんですね、私はサテラです。」

女の子同士気が合つのか、自己紹介をしている。

「俺はアストリアだ。」

「僕は聰一郎だ。」

二人が自己紹介をしたのをかわきりに、僕たちも挨拶をする。

「ホンと冥王が咳ばらいをする。

「さて確認するけど……能力は問題無い?」

「えっと……問題無いみたいですね。」

「これが魔法つて奴ね問題無いわ。」

知識や能力は問題無いみたいだ。

「さて次は……示談の話しだけど、君たちの望む能力をあげなさい

て、言われてるから、頭にソレをイメージして。」

「わかったわ。」

「何でも良いのか?」

「わうだね……不死や永遠の命は無理だけど、それ意外なら。」

僕は試したかった、アニメ・ゲームの技を頭に思い浮かべた。

(ゲート・オブ・バビロン……牙突……燕返し……ナイン・ライン
ズ……アースガズル。)

あたしは小説やゲームの魔法やシステムを思い浮かべていく。

(固有結界無限の剣製……カラド・ボルグ?……ルール・ブレーカ
ー……エクスカリバー……トランザム……レイ・ウイング。)

「「イメージが終わつた!」」

じゃあ次にスキルを試す前に、カードを引いてみて。

無表示のカード由いカード計8枚が空中現れた。

「どのカードを選んでも良いけど、必ず不幸属性カードがもれなく
ついて来ます」

「何よ……そのババ抜きみたいな展開!?」

「ギャンブル性が高いな。」

「賭け事は、20才になつてからね～ さあ何が出るかな～楽しみだ～」

さあ、さあ、と一人盛り上がる冥王様……カードを引く身にもなつて欲しい……

まずは僕から……四枚を選んで次々とカードを引く……

出たカードは

魔力：EX

剣術技能：S

知能：A

不幸属性は

仲間が見つかるまで……極貧とあつた……

「極貧カード……か、でも大丈夫仲間を一定数集めると、その不幸属性は消滅するから。」

僕の肩を叩きながら、そう言ひ冥王……人事だと思つて……

「お兄ちゃんドンマイ」

と真琴が励ましてくれたが、何だか嬉しそうだ……

「君もお兄さんと一緒に暮らすから、まともに巻き添えだよ。」

「ええーっ！」

「よほんと落ち込む妹、大丈夫だ……人で、極貧生活を乗り越えよう。」

「はあ……次はアタシの番ね変なカード出るな……やつ！……」

「気合いでカードを引く妹さて結果は……」

魔力：AAA

俊敏力：S

技量：EX

不幸属性は……

上級魔法や固有結界は天才的魔術師に弟子入りするまで封印します

「ええっーっ！何で…どうして？」

物凄く怒つて冥王に詰め寄る。

「強力な魔法や固有結界が使え無くても、大丈夫その証拠に、カラド・ボルグ？やルール・ブレーカーは使えるよ。」

そう言われて、慌てて能力をチェックする、妹もう少し落ち着け。

僕もさつそく、ゲート・オブ・バビロンで、ただ一つの魔剣エアをとり……だした？。

なんだ！？この斬馬刀の様な……！」、これは、あの途中でリタイアした、ワードナー・ズの、ボス青騎士ジー・フリーの武器「グラム・サンバー・ネメシス」しかし、何か形が違う……大きさが本編より長い……しかも両手で持たなければ、コケそう……いやコケた。

「冥王……これは一体どういふ事だ……」

「えつ……とちょっと聞つてね。」

と冥王は携帯電話を取りだし、誰かに連絡する。

（携帯あるのか？何時用意したんだ！）

連絡先の相手が出る。

「もしもしし、ギルちゃん？」

『冥王か？何用だ我様は、忙しいのだ……明日は、セイバーをあのフェイカーの所から、貰い受けに行かねばならぬのでな。』

「ゲート・オブ・バビロンのエアが、グラム・サンバー・ネメシスに変わつてて、転生者さんがクレーム言つてるよ~」

おい……誰が本来の持ち主にクレーム付けた？

『何かといえば、エアは我様にしか扱えん、この世で我様が使える唯一の宝具だ、元雑種の転生者には相応しい武器をくれてやつたで

あらう?』

「確かにゲート・オブ・バビロンの使用権は、ギルちゃんが……くれたけど。」

『そう武器はあの機械魔族から、我様が自ら奪い取つて、お前が自ら手をえた物であろうが。』

『なんだつて一つ、最初から、グラム・ザンバー・ネメシスしか渡すつもりしかなかつたのかよ……』

『そろそろ切るぞ、長電話は言峰が、五月蠅くて敵わんからな。』

「じゃ、頑張つてセイバーさんにフルボッコにされてねーっ」

冥王もそつ言つと、携帯を切る。

「さあ、異世界に飛ばすね。」

僕達四人は頷く妹の真琴が一言発言する。

「今回の事はアンタの責任なんだから、ちゃんと二人を幸せな人生にしてあげて、いい必よ!」

「大丈夫二人は責任を持つて、100才まで長生きさせるよ。」

それを聞いて安心した。

「聰一郎」

「僕に何か？」

冥王が話し掛ける。

「悪・即・斬はいつまで続ける?」

「」「人の、る うに剣 のファン?」

「無論死ぬまでさ……」

「そう言つと意識が遠のいて行く……」

冥王Side

二人を異世界に送り出した後、彼は玉座の水晶に手をかざす。異世界・ミッドグランドの女神イリアスに連絡をする。

「無事そちらに送つたよイリアス。」

「めーちゃんも嫌われ役ご苦労様。」

一人は楽しげに、そして 目は真剣に話し掛ける。

「あの二人なら、【彼女】を護れるね、だから……」

「幸福の女神ね名に誓つて二人とその仲間を守護します。」

冥王は満足げに頷く。

「さて、冥界の扉で待っている、方々を選定しなければ、いけないからまたね。」

「では、また……」

そして広間は静寂に包まれた。

プロローグ（後書き）

ギルガメッシュは音声だけで、これ以降登場の予定は有りません。

次回頑張つて行きます。

！マークを編集しました。

プロローグ2（前書き）

プロローグ第一段です。

いよいよ兄妹の冒険が始まります。

誤字を修正しました。

プロローグ2

「……………ちあさん

「……………お兄ちやん」

田が覚めるといつもやうとした森の中だった。

妹のサテラが不安げに顔を覗き込む、僕は身体を起こすと辺りを見渡した。

「無事に着いたみたいだね」

やつらついで僕は立ち上がる。

「此処……………何処だらう……………」

「分からぬよ……………お兄ちやん」

とつあえず森の中を歩いていくと、複数の人の気配がある。

「グヘヘヘヘ、有り金全部寄こしなー！」

「ヒヤッハー！何だつたらねーえけやんでもこいぜー。

「オラ、オラ、わざと金と食こ物よこしなー。」

（なつかしのアニメ北〇〇の拳だ。）

まるで……雑魚の「ノント」を見てこじるよつだ。

「とつあえず……先手必勝ね 」

サテラはヤル気まんまだ。

「高い授業料払つて貰つわよ、トレースオノー」

（て……赤い刀具さんの双剣じやあ無くて……何故…？鉄棒……）

「……」魔術師か！？」「

サテラは鉄棒を盗賊に勢いよくブーメランの用に投げつける。

「あべしー」

「ひでぶー」

「つわりばー」

死んでない……死んでないって……だつて……鉄棒ぶつけただけだよ……

「さて……行きましょお兄ちゃん 」

今の君の笑顔がここにひまつぱつコロコロ……

取りあえず先を急ぐ……彼の記憶をたどればこの先に村が有るはず、
まずは村に向かおつ。

「村に着いたらどうしよか？」

「記憶を元に村人に接触したら良いさ」

一番面倒なのは彼等と面識が無い事だろう……

その時……気配を感じるつゝ、さつきの雑魚じゃない……かなりの……大物だ最悪な事に……武器はもつっていない……

（ゲート・オブ・バビロンをでも気配は空からだ……ありつたけ道具を叩き込むか？）

「アタシが……空を飛んでカラド・ボルク？で打ち落とそつか？」

「魔力のケタが違う……隠れよう。」

魔力のレベルは低くともサテラと同じだらう……僕は頭の知識で知つたんだが僕やサテラ、クラスの魔人は、この世界に「ゴマン」といる……不必要的争いは避けるべきだ。

「お兄ちゃん……なんか向こうは戦う気が無いみたい。」

「そうだね……あれは大きな鳥だな！」

目ね前に人間の大人一人は捕えそうな黒い大鷲が舞い降りる、そして人間の姿に変身する。

「どうやら、ご無事のようですな、申し遅れました私は代々フェルト家にお仕えした執事のセバスチャンです。」

セバスチャンと名乗った男性の魔人は年齢は60才位の老紳士だ、左目に、モノクルを掛けている。

「ソウイチロウ様とマコト様ですね？」

「？」

何で僕達の事知っているの？

「実は女神イリアス様から貴方に手紙を、お預かりいたしました。」

セバスチャンさんが蝶印入りの手紙を渡してくれる。

僕達二人は手紙を読む。

手紙には、こう記されていた。

お一人共、ご無事に転生されたようですね。

私は女神イリアスこの世界の幸運を司る女神です。

まず貴方のご両親は残念ですが、アストリアさん達が亡くなる、5日前に空中海賊に襲われて、お亡くなりになりました。

（そんな……いきなり両親がいないなんて。）

それだけではありません」両親には多額の借金があり、その事後整理の為にアストリアさん達が、実家に向かう途中に、敵対勢力の暗殺者にお二人共殺されました。

（アストリアさん……お兄ちやんより……不幸……サテラちゃん私も
より可哀相。）

借金の方ですが、セバスチャンさんや周りの方々が全て片付けて、
くれましたので、安心して下さい。

（（ヤツター！ツキー　））

しかし暗殺者や敵対勢力は貴方が転生している事は知りません……
もし転生し生きている事がバレれば、容赦無く襲つて来ます。

（（な、なんだつーてつ。））

幸いご両親が残してくれた、空中武装船【クイーン・エターナル】
号が残つてるので、早くこの国から逃れた方が良いでしょう。

（（OK・です、サー））

しかし、この国に仲間になつてくれる方々が居ますので必ず合流し
て下さい。

追伸

冥王事めーちゃんが、貴方達に渡すアイテムをつかり忘れたそ
です。

獣王フェリオさんに、預けられたのではまずは獣王の森に向かって下さい。

それでは幸運をお祈り致します。

「セバスチャンさん獣王フェリオさんてどんな人ですか？」

サテラがセバスチャンさんに、フェリオさんの事を尋ねる。

「フェリオ様は獣王の一族の若き王です、の方は先代様とアストリア様とご交友がありました、まずは直接ご本人にお会いなられるのが賢明かと存じ上げます。」

「分かりました、獣王の森に案内して下さい。」

「畏まりました、アストリア様。」

こうして僕達は獣王の森に向かう事になった。

なるほど極貧生活は冒険フラグだったのか。

よーし頑張つて仲間集めよう!

プロローグ2（後書き）

頑張つて次話を書きます。

プロフィール2（前書き）

フェリオ一家と新キャラの設定が完成しました。

プロフィール2

フェリオ

年齢：23才位（推定）

外見：成人したクロノ

髪型：蒼いショートカット

瞳：緑（魔獣の時は金色）

口調：僕

性格：優しいが子供達に厳しい一面もある

獣化

頭が狐・胴体が狼・尻尾が狐

毛色は蒼

魔力：S

俊敏さ：SS

知能：A

スキル

魔獣化

固定武装

魔法使いの杖

魔法

火炎系

雷撃系

魔弾

ブラスト・ノヴァ

キャラ設定

ルイセと中の良い獣王
しかし子供に少し甘い。

ルイセ

年度：22才（推定）

外見：レイアースの獅堂・光

瞳：緑（魔獣化の時も同じ）

口調：アタイ

性格：勝ち気で少し短気

獣化

紅い魔狼

毛色：紅

剣術：S

俊敏さ：SSS

魔力：D

スキル

獣化

火炎ブレス

固定武装

バスター・ソード

キャラ設定

面倒見の良いお姉さんタイプ
欠点は早とちりが多い事

子供達の躊躇は少し厳しい。

家族の実権はフェリオが握っている。

フェイ（息子）

外見子供の頃のクロノ

年齢：13才（推定）

口調：ボク

性格：真面目過ぎて親に反発中

髪の色：蒼（獣化中金色）

獣化

子供のフェリオ（大きさは大型犬位）

キャラ設定

お父さんに憧れる少年

伸びをしようと父に叱られる。

ルフ（娘）

髪の色：赤毛のロングヘア

瞳：緑（獣化の時も同じ）

口調：アタシ

外見：子供の頃の獅堂・光

性格：少し甘えん坊

獣化

子供のルイセ（大きさは大型犬位）

キャラ設定

お兄ちゃんべつたりの甘えっ子、食べ物に好き嫌いがあるので両親に叱られている。

ルイセ・ルフェ・フェイのキャラ設定はレフェル様にご提案を頂きました。

レフェル様ありがとうございます。

アマルダ・レノアード

外見：同名のアマルダ

（ゲームブック・ウイザードリイ・外伝女王の受難を参考）

髪の色：赤毛のロングヘア

種族：人間

性別：女

年齢：18才

瞳：緑

性格
優しい

（本編とは変更しました。）

魔力：A

俊敏さ：B

器用さ：A

固定武装

司教の杖

魔法

神聖系

光系

キャラ設定

モンスターに襲われて居る所をアストリア達に助けられて、そのま

ま仲間になる。

可愛い動物好き

フェイやルフェを特に可愛いがっている。

プロフィール2（後書き）

頑張ってストーリ書いて行きます。

獣王の森（前書き）

いよいよ、冒険の仲間集めが始まります。

誤字・脱字を発見したので修正しました。

獣王の森

僕達は獣王の森に着いた辺りを見回すとのぞかな森が広がっていた。

セバスチャンさんに頼んで、フェリオさんに僕達の事を伝えに、行くように頼んだ周りを、狐スヤイスのルー似た小動物が走り回る。

「あつ 可愛いー」

サテラは動物達と楽しくはしゃいでる子供の頃から、リスやウサギが好きだったんだよな……あいつ。

よつと……近くの大木の木陰の下で横になる……何だか急に……眠気が……

「う

「聰一郎。」

誰……だろ……僕を呼ぶのはしかし意識が途絶える。

「「お兄ちゃんっ。」」

いきなりの大声に思わ、ず飛び上がる。

「「うあーっ……」」

「「キャッ」」

僕は驚いて大声を上げ！頭を木の幹にぶつけ！妹は尻餅をつく

「「いーたーっ！」」

「いてててつ、『ゴメン……サテラ。』

「もう～危ないじゃない……

背中をさすりながら立ち上がる妹。

僕も頭をさすりながら立ち上がる。

（取り敢えず、夢の話は言わないでおこう。）

何故なら……人間界に居た時の夢だからだ……多分【彼女】だろき

つと……

サテラが何か言つとした、時……突然！？爆音にも似た音が響き渡る、動物達も何處かに逃げて行く……

割と近い方角だ僕たちは領き合ひ現場に向かつ。

そこには、ジャイアントオーガがこん棒を、振り回しゴーレド・ドラゴンと戦つている激しい土煙と木々が吹き飛ばされる。

「いきなりドラゴンとジャイアントオーガのバトル！？」

「ゴーレド・ドラゴンを助けよつ。」

よく見ると所々怪我をしている……ジャイアントオーガの物じゃない……何故なら鱗や皮膚に鈍見たいな矢が刺さつている、多分密猟者にやられた傷だ。

「サテラ、恐いのなら無理わするな。」

「う、うん……私も頑張る。」

さつきの盗賊はただの人間だが、今はドラゴンと巨人との戦い……それにハンデも大きい……生兵法は危険すぎだ。

最悪ゴーレド・ドラゴンも相手にしなければ、ならない……そうな

つたら、こちらが不利だ。

「ゲート・オブ・バビロン。」

30程の宝具が巨人の周りに出現する。

「穿て！！！」

両手足そして、頭部を宝具が襲う

一撃でシャイアンントオリカが地面に倒れ、凄まじい土埃が巻き起こる。

卷之三

卷之三

「確かにアーティラリーで話が出来るって……受け継いだ知識にあつたよな……」

やつ言ふぞアーリン」と、ハリスにケーションを、びりやうたり出来
るんだ ？

そう考えいたら……頭に声が響く……女性の声だ。

(何故私を助けたのですか?)

「フュアな戦いじゃない、と思つたからや。」

出来るだけ魔族らしい口調で答える……例えドライゴン族が他種族に中立的な立場を取つっていても、転生者の僕達をどうするか解らない……

「それに……あんな下等魔族にドライゴン・ロードの眷属をくれてやるの訳にはいかない。」

「「お兄ちゃん……」」

妹が厳しい口調で僕を咎める……もつもつし、下手な言葉に付き合つてくれ。

(クスクス、妹さんは正直な方ですね……)

「はじめっから、バレバレだった……もしかして?」

(はい、他の魔族達は直ぐに……弱つている者も平氣で殺します……でも貴方達は……別の何かを感じます……)

「はじめて彼女が喋るのもかなりの、負担だろ……

「はじめに君に突き刺さつてる、鍔を抜く我慢してくれ。」

「じゃあアタシは回復を優先するね」

何とか銛は全部抜き出した、服が彼女の血で染まつたが、問題じゃない。

「回復終わったよ。」

（ありがとう……いつか……）

「いや、君の立場もあるし気持ちだけ、受け取るよ。」

彼女が翼を大きく羽ばたかせる、そして円をえがいて何処かへ去つていった。

「じゃあ……僕達もフヨリオさんに会って行こうか。」

「うん」

その時……凄まじいわしづを感じる……

「サテラ危ないー。」

「えつ、何? わやつ。」

咄嗟にサテラを抱きしめるみづて地面に、転がるよつて倒れる。

さつままで、立っていた場所が火の海に変わっている。

魔獣の気配しかも魔神クラス……かなりマズイ雰囲気だ。

僕達は立ち上がり、辺りを見渡す……しかし気配を感じる……真上からだ。

素早くそれぞれ別の方向に飛びのく！襲ってきた相手は、赤い髪の女剣士……姿は、レ　　ア　　の獅　　光が、成人したような美人だが……とても人とは思えない殺氣を感じる……それに、バスターードを軽々と僕達に向ける。

「フェリオの森で好き勝手するなんて、いい度胸してるじゃないか？」

「貴女は？」

警戒を解く事無く彼女に尋ねる。

「まずは自分から名乗りな！」

「いきなりおそ　　」

サテラが彼女を批難するが、片手で制して僕は名乗り上げる。

「妹が無礼を働いた非礼はお詫びします、僕はアストリア・フェルトです」

「アタシはサテラ・フェルトです」

すると彼女の顔が見る見る怒りに染まる……

(あの一つ、僕達何大変な、失礼をしましたか？)

「「アストリア」とサテラだつて……ふざけるじゃないよ…」

「ちょ、ちょっと

「こきなつ……どうしたんですか？」

ますます怒り浸透の彼女！誰か一つ、彼女の心の地雷踏んだのか教えてください。

「あの一人の最後を看取ったのは、アタシとフェリオだけさ……人のテリトリーを荒らすだけじゃなく、あの一人まで冒涜する気なら遠慮なく……ぶちのすよ！」

完全に、バーサーカーモードに入ってる……よく見ると怒りのオーラが溢れ出る。

「仕方がない……グラム・ザンバー・ネメシス改來い。」

何も無い空間にグラム・ザンバー・ネメシス改が出現する、魔槍を両手に持ち構える！サテラも仕方なく、カラド・ボルグ？を構える。

「へーえ、面白い得物持つてるじゃないか？」

「僕達が貴女に勝つたら、話を聞いて下さい。」

フンと彼女は鼻を鳴らす肯定と、受け取る事にした。

彼女が先に仕掛けるまるで疾風だ。

僕も魔槍で受け止める！剣同士が激しくぶつかり合って火花が散る！

「サテラ手は出すんじゃない、絶対にだ！」

妹に人間だった頃より、厳しい口調で針を刺す。

「分かったよ……お兄ちゃん……」

そう言つて妹は武器を收める。

「一端に騎士道精神かい？」

「いいえ……もしもの時の保険です……妹は。」

もし僕が彼女に負けたら、妹が狙われる……妹の魔力を温存させて戦うそれしか無い。

お互に剣を構える……多分どちらかが……倒れる、その時若い男人とセバスチャンさんの声が聞こえた。

「ルイセ、アストリア、一人とも剣を收めてつ。」

「アストリア様、御無事ですか？」

蒼い魔獣と子供の魔獣が近づいて来る。

頭は狐・胴体は狼・尻尾は狐の魔獣だ、彼がフェリオさん……だろう。

「ふえ、フエリオ……それにフエイとルフエまで……？」

ルイセと呼ばれた彼女は少し、しゅんなりている。

「お母さん……どうしてアストリアお兄けやんや、サテニアお姉ちゃんとケンカしてるの？」

「ボク達には、ケンカはするもんじゃない！でいつもひるむやへ言ってるクセに。」

二人の子供に逆に叱られたじたじになる、ルイセさん。

「これは……その……」

と言葉を濁す流石に、僕達も気まずくなつてきた……その時セバスチャンさんが、ルイセさんに助け舟を出す。

「フエイ様、ルフエ様、余りお母様を困らせては、いけません……お一人は……若旦那様とお嬢様にお大事な、お話があります、フエイ様とルフエ様は私しが責任を持つてお相手をさせて頂きます。」

「「ワーケ、セバスチャンさんに遊んで貰える~」」

そうつ言いて一人を僕達の話の邪魔にならない所にしかも、僕達の目の届く距離に連れて行く。

フエリオさんが人間に変身する。

「ミック版なはのクノにそつくりな感じだ、

ゲームしかやつた事が無いけど……

「ルイセ……もう少し一人の魔力を感じ取れないのかい？ いつもあれ程……」

な、何だフェリオさんがルイセさんにお説教タイムが始まった見た
いだ。

その時サテラが真っ先に異変に気づく。

「お兄ちゃん、アレを見てつ。」

「「……」

怪鳥に驚きみされた人が見えるーぐつたりとしている。

「アタシが行くわ、レイ・ウイング！」

高速飛行魔法を素早く唱え空高く飛び上がる。

「あんな高位な飛行魔法……アンタら一体何者だ……？」

「ルイセ彼等はイリアス様が、言つていた転生者だよ。」

ルイセさんが目を丸くして僕を見る。

怪鳥の後ろに回る、人に当たらない様に攻撃しないと。

その時お兄ちゃんの声が聞こえた。

(結果オーライ作戦で行く。)

「うううと、結果オーライ作戦で……まさか。」

ブلاスト・ノヴァの閃光が迫るアタシは素早く怪鳥の真下に回り込む。

(これってナー の後先考えて無い攻撃のパクリじゃない?)

怪鳥に魔法レーザーが命中する、人が落卜するのを空中で受け止める。

抱き抱えた人はアタシ達と、歳がそんなに変わらない女の子だった。素早くみんなの所え戻つて治療を始める……傷は大した事は無く、今はぐっすり眠っている……

「「お嬢さんは私にお任せ下せ。」

「「ボク達も」」のお姉ちゃんを診てるね、サテラお姉ちゃん。」

フェイとルフの二人にそう言われて、フェリオさんの所に戻る。

「それじゃ冥王様の預かり物を渡すよ。」

渡されたのは手紙と青紫の宝石だった、手紙には猫の肉球スタンプの蠅印で封をしてあった。

手紙Side

（ ）

ヤツホーツ、冥王様事めーちゃんだよ

（（アンタは……ヤギかヒツジか？））

多分僕の悪口を言いたい放題だから……

スルー スルー

実は君達に言い忘れたと言つよつ……忘れてました……ゴメン、ゴメン。

(今度会つたら……サックヤツチおうかな……?)

(……)

じゃあ、おフザケは此処までにして、本題に入るね。

実は君達と同じ転生者は後10位そちらにいるよ、ただし時間差でそちらに遅れて、現れるかも知れない……ただイレギュラー的な存在も確認されてるから十分に気をつけてね。

僕も詳しく調べてるけど……君達の世界//シードグラントの邪神が関係していると思ひ。

何か解つたら連絡するよ。

ぐつびりひへー!

* * * * *

アストリアSide

「イレギュラー的な存在。」

「……」

少し気分が重くなりかける、その時セバスチャンさんが、コホンと咳ばらいをする。

「では隠れ家にて案内致します、若田那様、お嬢様。」

「フューリオをアタイ達も。」

「よし、フュイ、ルフェ行くぞ。」

皆が出発の準備を始めるフュイとルフェちやんが、

「「あのお姉ちやんは?」」

たしかにこんな場所に置いて行くのも……

「アタイの背中に乗せて運ぶよ。」

ルイセさんが魔獣に変身して女の子を運ぶあいよーひ仲間集めだ
な。

僕達はセバスチャンさんの案内の元隠れ家に向かった。

獸王の森（後書き）

次話頑張つて執筆します。

誤字を修正しました。

いよいよ、隠れ家からアストリア達が出発します。

誤字表示を修正しました。

ストーリ描写に矛盾点が有りましたので、修正しました。
大変申し訳ございませんでした。

「若田那さま、お嬢様、もうすぐ着きます。」

「田の前……岩だけよセバスチャンさん?」

隠れ家に着いた……セバスチャンさんは隠しスイチを入れる……重そうな岩が動き出す……入り口は瓶にカモフラージュされていた……とりあえず中に入ろう。

中はまるで造船所だった、大きな船が見える……

(これが……クイーン・ヒターナル?)

「では……メイド長のミナが皆さんを船内に、」
案内いたします、
それからわざわざお嬢さんも医務室に運びます。」

「よろしくお願ひいたします皆様……申し訳遅れました私メイド長
を努めてさせて頂いてる、ミナと申します。」

助けた、女の子を部屋に運ぶ……ミナさんに案内されて彼女を運ぶ
と扉のプレートに【医務室】と書いてあった。

「取りあえずこれで一安心だな……サテラ?」

気が付けば妹の姿見えない……仕方が無い探しに行くか……サテラ
は、何処だ? 女の子を医務室に運ぶと勝手に何処かへフランフランと行
つてしまつたようだ……

仕方が無い探しとするか……そつ決め僕は船内を探し回る……やれやれだ……

（困った妹だな……）

「えーっ、何で立入禁止なの～？」

「今は駄目じや、日を改めて来るが良い！」

通路を進むと大声が聞こえる……その方向に向かうするとそこには、マリベルにそっくりな女の子とサテラが口論になっていた……

「一体何が

「「」の者が！」

「「」の女のが！」

僕の言葉を遮り、一人が互いに指を刺す。

彼女はマリアベルと名乗り、この船「クイーン・エターナル」号の機関整備の真っ最中で、とても忙しい、見学なら2・3日後にするが良い。』とサテラに言った。

それを聞いて『何よ、けちん坊!』と言ひ返したのが原因だった……

「サテラ、マリアベルさんに、ちゃんと謝るんだ。」

僕は不毛なケンカを、止めるべく静かにサテラをたしなめる。

「…………ごめんなさい。」

「まあ…………良いじゃない?…………機関整備が終わったら教えるから、一旦改めて出直すが良い…………わらわも済まなかつた…………」

「若旦那様、お嬢様、セバスチャン様がお呼びでござります。」

セバスチャンさんが?多分僕達の今後の事だろう?

「解りました、場所は何処でしょうか?」

「はい、作戦会議室でお待ちです、この船の階層の一階の通路側を左に真っすぐ、お進み下されば、すぐにお分かりになられます。」

「解りました、では今から作戦会議室に向かいます。」

「えへと、ミナさん?案内はしてくれ無いの?」

サテラが、失礼な事を聞くすると彼女は、申し訳なさそうな顔をして案内出来ない理由を、教えてくれた。

「申し訳ございません、人手不足で……食材の調達に街に行かなけ

れば、なりません。」

なるほど、道理で隠れ家に、わずかな人しか居ないのか多分リストラをして人件費を削ったのだろう。……

「『めんなさい、ミナさん』

「いえ、本来ならばわたくしが『案内しなければいけませんの』。元々

サテラが自分の非礼を詫びた後、作戦会議室に向かう。

「作戦会議室」→Side

扉をノックし返事を待つて部屋に入る、部屋の中には、円形の大きなテーブル型の席があり、それぞれの席に、モニターディスプレイが設置されている。

（凄い……まるで宇宙戦艦か何かの設備見たいだ。）

「わざわざ、『足労いただき誠にありがとうございました。』

セバスチャンさんが会議室の奥で僕達の事を待っていた。

「僕達の事ですね？」

僕は本題を思い切つて、切り出した。

「はい、貴方方の……いえ前ご当主様の事でございます……実は先代様は、冒険家兼商人でしたが、もう一つの裏の顔【空中海賊】でございます……」

「ハイ……今、何でおっしゃいました？セバスチャンさん……海賊……最悪……ヒヤッハー？……良くて40秒で仕度しな？だろつか……」

「『安心下さい、決して先代様は貴方方が思われる、お方では有りませんでした、そしてお優しい方でもありました……』」

「あの失礼ですが……この世界の両親は何を、していたのですか？」

「思い切つて両親の事を、聞く海賊をしていたのは、少しショックだつたが……聞かなければ何も分からぬ。」

「はいご両親様は、主に交易をしておりました。後は……奴隸船を襲撃して奴隸となる種族の方々を保護していました……」

「それじゃ……悪い人じやないと？」

「海賊をしていたなんて、ちょっと……ショック。」

「海賊行為は犯罪だ、当然奴隸商人もだ……」

「まあ……ショックなのは、よくお分かりになります……でも、あ

の一人は最後まで他人の為に鬪われました。」

僕達は言葉がでなかつた……重苦しい雰囲気を……振り払つてから、セバスチャンが切り出す。

「実は転生された、アストリア様からお一人に、お預かりした物が有りますどうぞお受け取りください。」

そう言つて、セバスチャンさんは武器を渡してくれた。

「魔剣シュヴァルツアーと蛇腹剣ダンシング・スネーカーでござります。」

魔剣はサーベルの様な片手剣だった刃は鋭く、軽々と操れるそうだ。蛇腹剣はサテラの武器だ、その名の通り鞭みたいに刃が伸びる剣だ。

「それでアタシ達も海賊になるの？」

「いえ、貴方方は自由に生きて欲しいと、アストリア様から『伝言を承りました。』

「肝心の借金の事だけど……訳を聞いても良いですか？」

「いくら自由に生きろと言われても、先立つ物が無い以上……越えては為らない道を進むか……決断しなくては為らない。」

「借金はこの船、クイーン・エターナルの建造と内乱の収集の為に、財産のほとんどを使いました。」

「内乱……彼から受け継いだ知識にありました……酷い戦いだつた

のですね？」

無言で頷くセバスチャンさん……重い空気が纏わり付く……

「質問して良い？」

「何でしょか、サテラお嬢様？」

いきなりサテラが、片手を上げて質問する。

「冒険者ギルドは、この世界にある？それなら海賊に成らなくとも……」

「そうか！」

しかしセバスチャンさんが僕達の淡い願いを一瞬で粉碎する。

「はて……その様な組織は聞いた事は有りません……申し訳ございません。」

一人で溜め息を吐いた。

「ですが冒険者は直ぐになれます……ただし大変危険ですが。」

「解りました、その方面で頑張つて仕事を探しします。」

「そうね案外早く仲間が見つかるかも～」

セバスチャンさんは少し難色を示したが、最後は折ってくれた。

そうと決まれば、行動あるのみ一丸あつた頑張つて仕事と仲間を見つけるべ。

行こうとしたら……ルイセさんにはび止められた、彼女曰く……

「アタイも連れて来な。」

「アタシも行く～つ」

「ボクもアストリアお兄ちゃんとサテラお姉ちゃんの役に立ちたい」

フェイとルフェが大はしゃぎで着いて来ようとする、その時フェリオさんが穏やかだが厳しい口調で一人をたしなめる。

「駄目だよ一人とも、アストリアお兄ちゃんとサテラお姉ちゃんが、困つているだろ?だから一人とも、此処でお父さんとお留守番しないね?」

「は～いつお母さん、お十産げお願ひ」

「チエツ、ボクだつて……早くお兄ちゃん達の役に立ちたいのに……」

「聞き分けが無いと、魔法は教えないよフェイ?」

「……はいお父さん。」

渋々引き下がる、フロイ フェリオさんは厳しいお父さんみたいだ……でもそれは優しさの裏返しなのだ。

ちよづどその時、ミナさんが助けた女の子が目を覚ましたと教えてくれたので僕達は挨拶と襲われた事情を聞く事にした。

＊＊＊＊

意務室に入る、最初は僕達に怯えるかと、思っていたが直ぐにフロイとルフェに、質問責め & 懐かれて戸惑っていた。

「――。あ、あの助けていただいて有難うござります。」

ひとしきり、フェイとルフェにもみくちゃにした後ルイセに一人は猫掴みで医務室から、つまみ出された。

「コホン、ではよろしいですか？まずは自己紹介を……」

「こちらから押しかけて、あまつさえ……一人の子供に、質問責めになつたのだから、こちらが名乗るのが礼儀だひとしきり自己紹介を終える。

「私は、司祭のアマルダです襲われたのは聖女様の護衛をしていました。」

聖女？誰の事だろ？……

「聖女シルファ様ですな。」

「はい……『キコートス』に、攫われました……」

（『キコートス？』とかで聞いた名前だな……）

何とかその時の事を、聞き出したかつたが、医者のヘインさんに全員追いで出された。

「じゃあ、カイルスの町に行くとしようか。」

「ええ行きましょ 」

「そうだね、まずは町に行つて何か情報や仕事を探そう。」

町に着いたら取りあえず仕事だな、みんなに負担は掛けたくない。

そして、僕達は隠れ家を後にするもちろん、僕とサテラ、そしてルイセさんが着いて来る居残り組は、フェリオさんとセバスチャンさんが隠れ家に残つた。

セバスチャンさんは、隠れ家の管理をするためで、フェリオさんは子供たちの面倒を見るためだそつだ、ルイセさんだと……フェイ君

とケンカになるそつだ、特に冒険が絡むと……男の子は何処の世界でも大変だな。

これ冒険に（後書き）

次回頑張ります。

誤字を修正しました。

キャラ紹介③（前書き）

間違えて大聖堂騎士団の方に投稿しました。

大変申し分けございませんでした。

誤字を修正しました。

キャラ紹介3

レスター・ウォルスター

(転生前の名前：如月・正樹)

外見：ラングリッサー5のシグマ

年齢：17歳

髪の色：赤毛

瞳：紺

性格：熱くなりやすい。

口調：俺

種族：半魔人

能力

魔力：SS

技能：A

俊敏さ：A+

魔法

回復

スキル

二丁拳銃

ファイネストアーツ

（ワイドアームズ5、ガウンを参考にしました。）

アクセラ레이ター

ロックオンスナイプ

固定武装

ロンバルディア&ファイアール（銃剣式二丁拳銃）

ガンギールHG35対怪獣用狙撃ライフル

特殊能力

ガーディアン召喚

ルシェド（欲望の顎）

キャラ紹介

真琴のボーイフレンドだった同級生、真琴と入れ替わった、サテラに頼んで、こちらの世界に来る。

神羅・綾人

髪の色・紫

瞳・赤

口調・俺様

性格

熱いく頼りなる。

ふあふあした動物やモコモコ動物を性別に関係無くモフモフして愛でる、という困った性癖がある。

スキル

魔力・EX

剣術・S

俊敏さ・A

スキル

稻妻突き

二刀十字切り

魔法

ラグナ・ブレード

固定武装

双剣二刀流

キャラ紹介

主人公達と面識の無い同級生、正樹と人間界に転生した、サテラの話をして聞いて、本物の獣人達をモフモフするために、アストリア達の世界に転生した普段は、熱くて頼れるが…モフモフの対処の獣人達を見ると…。

（神羅俊人はカトラス様から使用のご許可をいただきました。）

キャラ紹介③（後書き）

次回頑張ります。

依頼そして…… イレギュラー参上（前書き）

眞王との会話の描写はレフェル様の「許可を頂きました。

誤字を発見して修正しました。
ストーリーを書き足しました。

依頼そして…… イレギュラー参上

カイルスの町に着いた町はけつこう賑わっている、僕達はフードを深く被り顔を隠す、敵対勢力の海賊や、ゴキュースに見つかれない為だ。

なにやら通りの奥が騒がしい……と一きなり店から人が扉ごと吹き飛んで来る！

（ケンカ中か……いや、また一人……一人……うん無双だな……）

合計八人が……道端に転がっている。

「たつく……人が機嫌よう飲んでたら……なにうしご等のリーザ嬢にてえ出してん？」

（何故！？異世界で関西弁？）

店から出て来たのは、僕達と同じ年の女の子だった、赤毛に近い栗色のショートカットに、整った顔立ちの可愛い娘だが、彼女から溢れ出す怒りのオーラがそれを全て台なしにしている。

「たつく……ちよつとこずいただけで気絶するんやつたら最初からケンカ売つてくんなつ。」

「オーケイ、エレノアじゃあないか相変わらず喧嘩つ早いな。」

ルイセさんが片手を振つてエレノアと呼んだ女の子に近づく知り合いだろうか？

「ルイセ姉さんも相い変わらず元気そつでなに寄りやつ。」

ふと彼女と目線が合つ、視線は何処となく楽しそうな……いや、例えが悪いが獲物を見つけた肉食獣の目つきだ……此処は逃げるか？

「なあ、アンタ等仕事探してるやろ？良い仕事して見る気イない？」

「？……仕事ですか。」

「うへん、どうじょうつか？お兄ちゃん。」

取り合えず店の中に入る事にした、まずは仕事の内容で判断しそう。

昼近くなので客は多い凄い賑わいだ客は、全員冒険者が傭兵ださつきの「ロツキは傭兵崩れかも知れない。

一番奥の席に先客が居る、一人は黒豹の獣人そして、ハーフエルフの女の子だ獣人の方は隻眼の男性だ、僕達より年上だらつ、ハーフエルフの女の子は聖 伝説3のリースにそっくりだ、服装は白いロングコートを着て居る、武器は……バイアネット……しかもライフルタイプの奴だ。

「まずは自己紹介やな、うちちはヒレノアやそんでもつてうちのパートナーの……」

「ガレスだ……よろしく頼む。」

「おー！ 人にお世話になつてこる、リーザですよ！ おへい！ お願いします。」

「

「アタイはルイセだよ。」

「ア……いえ、アーヴィングです。」

「妹のアルティシアです、よろしく。」

取り合えず、ゲームキャラの名前で偽名を名乗る誰が聴いているか分からぬからだ。

「さて自己紹介も終わつた所で、本題にはいるわ。」

エレノアさんの言つ仕事は……「キューースに、さらわれた聖女「シルフィア」の護衛だった、エレノアさん曰く自分達はレジスタンスで、連中の裏を書いて救出したらし。」

「今は冬の端で、ルヴィアが守つてゐ……けど何時まで持つか分からへん。」

「それに、ルクの森に来ている援軍の連絡が、此処数日途絶えてゐる……かなり近くまで来ているらしいが……」

状況をエレノアさんに詳しく聞いた結果、ルクの森にサテラが、冬の間に僕が別々に向かう事になつた、何でもコキューースの主要メンバー「ジュデッカ」が、すぐそこまでに来ているらしい……サテラにはレジスタンスのメンバーを見つけたら、隠れ家に戻る様に言つておいた。

冬の晩に急いで出発する。

アストリア達が行動を始めたその頃……冥界では……

冥王Side

今……僕は悩みを抱えている、原因は三人の転生者だ一人の理由は理解できる……まずはもう一度彼等の本心を聞こう。

「で……君は人間界のサテラさんに、本当の話を聞いてしかも彼女に送つて貰つたの？」

まあ……彼女は純粋で一途だから君を送つて来たんだまあオマケは論外だけど……ね。

「ああ……転生者真琴の力に成りたいんだ。」

「人間界に念願の転生ヒヤツホー！」

「ふあふあ、モコモコをモフモフし愛るために此処に来たんだ！文句を言わず転生をせろ、怠慢冥王！」

「五月蠅い黙れつ、駄目魔人と駄目人間！！」

「……」

「フウ……人間じゃないけどね……特別休暇を相談したいよ……

「君達一人とも、一応決まりだからカードを引いてね。」

「一人とも……いやオマケ君が破格のカードを引きやがる……なんて強運の持ち主だ。」

「俺様の不幸属性は……モフモフ厳禁だと……ふざけるな！俺様からモフモフを取り上げたら、カツの乗つていらないカツ丼ダーツ！」

「うおつ！なんだ……この圧力フレッシャーまるで……ロードブレイザー級の魔神レベルのオーラで不幸属性カードが灰になつた……」

「わかつた、わかつたから君の不幸属性は無しにするから落ち着いて一つ。」

「はあ、はあ、見たかっ、これが俺様のほん」

「ヒヤツホー！」

「五月蠅いつ、黙れつ、さつさと向こうの世界に逝きやがれーつ！」

！」

さて……はた迷惑な人間は魔人に駄目魔人は人間に転生した……残りは……純愛君だけだ……彼だけじゃあ不安だから……うん、ルシエドと一緒に行つて貰おう。

「欲望のガーディアン此処に集え。」

魔力を集中し彼を呼ぶ、しばらくして巨大な漆黒の魔狼が出現する。

「オレを呼んだか？冥王」

「最上位のガーディアンルシエド君の力を、この少年に貸してくれないかい？」

「フツ……良いだろオレも退屈していた所さ……」

如月正樹Side

正直サテラに聞くまで、半信半疑だったが……此処までやるとは……思わなかつた。

「じゃあ能力の確認してくれる?」

魔力……問題無し……スキル問題無し……後は武器だな。

「ロンバルディアとファイールの魔導式バイアネットをあげるよ。

」

そう真王は言つて、対の先に刃が付いた二丁の拳銃を渡してくれた、何でもさつき人間界に転生した男の持ち物らしい……

「それじゃ向こうの、彼女によろしくね」

「ああ……必ず伝えるけど……いきなり大ピンチで、不幸属性カードにあつたが……意味がサッパリだ。」

「時期に解るよ……でも不幸属性はすぐに消滅するから気にしなくて大丈夫だよ」

「お、おい! 一体

そう言つて俺の意識が飛んだ……

『気がつくと、見たことも無い部屋にいた、此処が真琴が転生した世界だろうか？』

（それにしても、SFに出てる未来の牢屋か？此処は。）

『そんな所で呆けてないで、こつちに来なさい。』

女の子の声でも誰だろ……そう思っていたら、扉が開き、通路が見える……けど薄暗い……せめてライト位点けてほしいものだ。

『明かりが、点いた方向に進みなさい。』

『俺の考えて事が解るのか？』

しかし返信はない……シカトかよ……まあ、向こう行けば解るよな。

＊＊＊＊

通路を進むとドアが開く中は、ブリッジ……この造りは……ロス
ゴニースのソードブレーカーか！？

『その通り、この船は貴方の中の記憶をもとに連中が造り上げたもの。』

(連中…… 一体どういう事だ?)

「誰だつ…… 君はベアトリー・チョ?」

「正解ね私のマスターとしては、合格点ね。」

なんでワイルドアームズの黒幕がソードブレーカーに…… しかも俺がマスター?

「詳しい説明は後ね…… ロキュートスの艦隊が来るわ」

彼女が言い終えるのと同時に、ソードブレーカーの周囲に、艦隊が出現する…… 艦ふねは、G・ジ・エ・ネで見た事のある…… ザ・ト軍のナスカ級高速戦艦でもカラーリングが、シーマ艦隊色?で…… 旗艦がロスト・シップの「ゴルンノヴァ」かよ…… ナスカも性能が改造されてチート状態だな。

「ベアトリー・チョ 戦闘体制に以降しろ。」

「無理ね…… だって、この船は私が貴方ごふう』と奪つて来たのその時の戦闘でエネルギー残量は30%位ね。」

いきなりピンチでこの事かよ…… ゴルンノヴァとの距離が有るのがせめてもの救いだな。

「戦うのは無理なら逃げに徹したい。」

「了解…… それから貴方の立場気になる?」

たつぐ、こんな時の大した余裕だな…… 一応聞いてみる。

「貴方は、連中の人体実験のサンプルよ。」

「なるほど……それで俺はこの船に載せられてたのか……」

『ソードブレーカー直ちに停船しな、もし逃げようとしたら……どうなるか分かつてん……だろうね?』

声もシーマかよ……逃げるが勝ちだな、船体を左に回頭挿せる……やつぱり撃つて来やがった。

ナスカ級が三隻が迫つて来る（MS搭載していないのか?）ゲームなら八機出て来るよな……

そう思もつた、その時いきなりナスカ級の後ろから青い機体……あれは機械竜「ロンバルディア」がドラゴニックガンブロスターを放つ！回避が遅れた一隻が吹き飛ぶ。

前の敵は混乱しているな対空砲火が、ロンバルディアを襲つが自慢の機動性でことごとく回避する。

「ベアトリーチェ、サイ・ブラスターを撃てるか?」

「問題は無いわ。」

体勢を立て直しに、掛かつた一隻の後ろに一発見舞う黒煙を噴き上げ地上に落下する。

「全エネルギーをエンジンに回して逃げるつ。」

「ロンバルディアがついて来るよつこと言つてゐるナビ、ビツクの
？」

行く宛てがない、俺達には好都合ださつやと付いていりや。

＊＊＊＊

シーマS.yde

「ふん……所で連中のトレースは……出来てゐるんだうね？」

彼女は自分に「えられたロストシップ、ゴルシノヴァに尋ねる。

「その点は問題は無い、既に逃走経路は伝えてあるしかし……」

「ああ……やう言つ事かい？」

つまりソードブレーカーの本来の擬似人格と戦いたいのか……律儀だねえ。

とりあえず、あの下手な魔術師の出来損ないと、キザたらしい商買人に教えてやらなければねえ……

さて、このシーマ様の勝負所を見せつけてやるさね。

神薙綾人Side

正樹が「ゴルンノヴァ」と対峙している頃、彼は森の中をさ迷っていた。

「たつぐ……此処は何処だよっ、後獣人達は何処だーーっ！」

ガサガサと茂みの中で何かが動く……もしかしたら、さあ……モフモフの時間だぜ！

案の定……何も知らないフェイが魔獣の姿で何も知らずに顔を出した……

「か、可愛い……ジユルリ……」

「えつ、えつ、何！お兄さん？」

フェイに俊が襲い掛かるとした瞬間、雷撃が俊を包み込む様に直撃する。

「あやややややつーあ、アッザム……リーダーとはやるな……ガク……

…

「夢舟さん……」のお兄さん……」

「だらし無い小童じやな……フェイ余り一人で遊ぶでない……フェイ

オが心配しておつたぞ。」

そう言つて片足を掘んでズルズルと俊を引きずり、隠れ家に連れて
帰る九尾の夢月……

＊＊＊＊

神薙綾人Side

しばらくしてから、隠れ家のメンバー全員に囲まれる……俺様に対する質問責めだな……

「何をじろじろ見ておるのだ子童？」

「てつ、おおつ！獣人の親子が三人に、吸血鬼、もとい、ノーブルレッドか……残念……で、俺様に電撃くれたアンタが九尾だなつ。」

「

全員が目を丸くする、俺様に掛かればこれ位の判別は出来て当然の結果だ。

「疑うだろが……俺様も転、ぐべえつ、誰だ俺様にタワシを投げたのは！」

「フヨイ・ルフェ、アマルダがお前達を捜しておつたぞ、クイーン・

エターナルに行つてなさい。」

「「はいアイリスお姉さん。」「

アイリスと呼ばれた髪の毛が銀色バージョンのホ 觀たいな獣人のお姉さんが、俺様にタワシをぶつけて一人を船に向かわせる。

「君が転生者で有る事は、子供たちに秘密にしてくれ。」

「まあ…… そうだな、所で気になる事が一つ有るな。」

「何だい？ 気になる事で。」

「クイーン・エターナルはロボットを搭載しているのか？」

「ほう、中々田舎といのじやな、確かにゴーレムは、ルシファガ三機搭載してある、失礼をしたのじや、わらわはマリアベルじや。」

「俺様は神羅綾人だ、奥のシートに隠れてる機体はロンバルディアか？」

赤い機体だか、あの形状はロンバルディアだ、しかしまるで動かない機能停止している見たいだ。

「ロンバルディアを知つておるのか？ おぬし…… 驚いたぞ。」

「まあ一応…… ゲ…… いやそれより、クイーン・エターナルだか……」

「……」

Gジ ネで見た、エターナルそつくりの戦艦が、隠れ家に係留され

ていた、ただ色は白く艦首が流線型で、ミーティアの変わりにビーム砲が艦首には衝角が有る。

「あれは衝角か？」^{ラム}

「いや、最新型の紋章砲「ラグナロク」じゃ。」

紋章砲は分かりやすく言えば、宇宙戦艦ヤトの波砲に近い物だ
そうだ、マリアベルの説明がサッパリ分からんので、俺様流に解釈
した。

「話しを戻すぞ、あの機体はロンバルディアの同型機か？」

「あれは、レジスタンスが撃墜した、ワイバーンじゃ、ただ修理が
終われば頭脳回路をいじくりパイロットを……」

「俺様がパイロットをやるぞ、いや……是非とも私にさせて下さい
！マリアベル様～つ。」

と時代劇の印籠を見せられた、越後屋の様にお願いする。

「ウム、わらわに任せておけ、綾人とやら大船に乗った積もりでわ
らわに任せでおぐがよい。」

「はははーっ、あと魔改造もお願い申し上げます。」

「魔改造でなんだ？」

マリアベルに耳打ちで、魔改造を説明すると、彼女はパタリロの速
さで走り出しワイバーンを改造し始めた。

「どうあえず自己紹介が終わつたな。」

全員と自己紹介が終わり本来の俺様の目的を伝えた。

ふあふあモフモフさせると……

「「……」

「あの……皆さん……何か問題でも?」

「……」の、いつけ者が一つ・モフモフじゃと・フニイやルフニを襲おうとした罰じや!」

夢円さんの目が光る……尻尾は……九本全開……

「ふあふあ……モフモフ……幸せだ〜つ。」

モフモフは幻術で……堪能した……いつかモフモフをしてやる……
そう思いながら意識が埋没した……ガクッ。

依頼そして…… イレギュラー参上（後書き）

次回頑張ります。

ロストシップ・ゴルシノヴァ・ソードブレーカーは小説版元にして
います。

誤字を修正しました。

サテラ対飛天將軍（前書き）

サテラの活躍シーンと俊対エレノアの燃え&萌えのバトルを組み合わせみました。

サテラ対飛天將軍

ルクの森に着いた、辺りに魔物達の気配がする…アタシに付いて来てくれたメンバーは、エレノアさん・リーザさん・ルイセさんの三人が来てくれた。

お兄ちゃんはガレスさんと一緒に冬の晩に向かつた。

「かくれんぼのつもり?」

「少しばかり隠れなよつ。」

「伏兵にもなれへんな……アンタ等。」

茂みの奥や木の影……木の枝にたくさん居る。

「ふーん、スライムにコボルド……ウニア・ウルフにリザードマンに魔術士か……無双が出来るね。」

みんなそれぞれ自分の獲物を構える、エレノアさんは鉄扇ルイセさんはバスター・ソードだリーザはシュー・ティング・スターを無言で構える。

「サテラ、此処はアタイ達に任せて奥にいきなつ。」

「ルイセ姐さん、うちらで露払いするんか?」

「ヤリと笑うルイセさん……」つなつたら、奥に進むしか選択肢は無い。

アタシは蛇腹剣ダンシング・スネーカーを鞭の様に振り回し襲い掛かつて来る雑魚をなぎ払いながら森の奥にすすむ。

「はああああつ！」

道を塞いでいた、スライム数匹が弾けた水滴見たいに切り裂かれる。

脇目も振らずに森の奥に進んで行く。

＊＊＊＊

? ? ? Side

くう……ギリアムとリガティに好いようにされている、自分に腹が立つ……

「はあああつ！」

一二丁拳銃の残り弾を全て一人に見舞う！しかし高速で飛び回る一人には、かすりもしなければ、当たりもしない。

「レイル……諦めなよ……ボクは君を殺したくない。」

リガティが説得を僕に始める……その時だつ、背中に激痛が走り意識を失う……ギリアムが背後から、魔弾を放つた。

「ぐあああつー！」

「レイルーつー！酷いよつ兄さんつ。」

「フン……油断する奴が悪いのだリガテイ。」

レイルが地面に向けて墜ちる……その時サテラがレイルを空中で受け止めた。

「ふーん」一対一で卑怯とは言わないけど……余り褒められた手段じゃないわね。」

「うう……」

「それがどうした？女」

開き直りサテラを挑発する、レイルを抱きしめ地上に降り木の影にレイルを寝かす。

「そーてこれから君達を、アタシが倒す。」

サテラは意識を集中させる……彼女の身体が紅く光り出す……そして。

「トランザムー！」

目の前の女魔人が紅く光り出したと思ったたら、視界から消える！

「なつ……ボクの眼を持つてしても捉える事が出来ない……なんて……」

殺氣を感じ避けよとしたら、弾き飛ばされる。

「……くつ何処？」

「ハアツ」

その後はまるで空を鞠の様に弾き飛ばされ続けた、地面スレスレで転がる様に墜落した。

「ぐあつー……ひひひひ。」

喉に鋭い刃先が押し当てられる……これまでか……ボクは死ぬ事を覚悟した、しかし相手は意外な事を口にする。

「これ以上は、抵抗しない方がいいよ。」

「ボクを助けるの……どうして？」

彼女は剣を収め笑顔でボクに話しかけて来る、まるで姉の様に話しかけてくる。

「キミ、アタシに恨みになんかもつて無いでしょ？」

呆気にとられた……レジスタンスは必ず捕まえた者は、直ぐに殺すと教えられていたから……

その時、彼女の背後に兄さんが魔弾を放つ！

「行けつ、ファンネル！」

ファンネル……？聞いた事の無い魔法だな……彼女の周りに、魔弾が複数現れ兄さんが放つた魔弾を撃墜する残りは兄さんに向かっていく。

「チツ……だが……まだまだ、だな。」

追尾して来る魔弾を全て撃墜する、その時彼女の紅い光りが消え彼女が苦しそうに息を整える。

「はあっ、はあっ、まいっただなートランザムの永続時間が短いなんて……」

兄さんが彼女に向かって蛇腹剣で襲い掛かる、彼女にさっきまでの勢いは無い……ボクは何故か身体が勝手に動いていた。

彼女を突き飛ばし、地面に倒れ込む、刃先がボクの翼を掠める。

「ちよつと、き、キミー。」

「うひぐつ

「何のつもりだ？リガティ？」

兄さんは空高く舞い上がり、僕達目掛けて魔弾を放つ。

「裏切るなら……妹と言えど容赦はしない。」

ボクは彼女上に覆いかぶさり、兄さんの攻撃から彼女を守る。

「キミ……何であたしを？」

「飛天族は……誇り高い種族だから……うつー」

背中に魔弾の直撃を受け意識を失う……兄さん……ボク達は何処で、飛天族の誇りを失つたのだろう……

* * *

ようやく俺様の愛機「ブラック・バハムート」が完成したぜ！

神薙綾人Side

「流石は、マリアベルさん良い仕事だぜ、副砲にレーザーガドリン
グ砲に主砲は、ハイペリオンブラスター、翼にゾードのブレーラ
イガと同じ威力のウインズカッターを装備してくれたな。」

しかし試験飛行中にニューイプ並に、何かがひつかかる……モフ

モフはルフエとフエイの一人を加減してさりげなく、したし……向こうの森で人外の気配がする。

「男だが翼人……しかしヤバい雰囲気だな、しかたがない追っ払ってやるぜ！」

機体の速度を上げて真後ろから、ガドリング砲を見舞う。

「レーザーガドリング砲ファイアーハー！」

チイ……寸前でかわされたしかし、機体を素早く回頭させて。

「生態ミサイルファイアーハー！」

マロスの坂 サーカスをしたが、こいつ……難敵だな、全部のミサイルをかわすか撃ち落としやがった。

「チツ……機械竜「ドラゴン」か……潮時だな。」

そう吐き捨てるに逃げ出した、俺様は去る者は追わずに徹する。

機体を変形させ地上に降りる、見ると瀕死とまではいかないが、翼人の女の子と俺様と同じ雰囲気の女の子がいる。

「貴方は誰？」

「君と同じ転生者の神羅綾人だ、君が介抱している娘は？」

「リガティで呼ばれてた……」

その時森の奥から、半獣人の女性……多分ルイセさんだなと、ハーフエルフの女の子と何故か俺様とは永遠のライバルになりそな鬼娘が現れた……

顔は、なの のハ はやてなのだが……油断出来ないと本能が囁く……

＊＊＊＊

エレノアSide

やんや……この半魔人……恐ろしく強い魔力を感じる……だけれど、別の意味で本能が受付へん……敵ではあらへんけど……何か色んな意味で危険やな。

「酷い傷……直ぐに手当てします。」

リーザが手早く回復魔法をかける止血は出来たが、危ない状態やな

……

「その娘誰にやられたん?」

「ギリアムで人です。」

飛天將軍ギリアム！？またとんでもない相手とやり合つたんやな、サテラ。

「怪我はしてへん?」

「いえ大丈夫です、魔力の使いすぎで……」

確かにサテラの顔色は顔面蒼白や……まあ無理もないか。

「リガティとサテラは俺様が隠れ家に連れて帰るぜ。」

「血口紹介してる暇は無いし、皆で帰ろか?」

機体竜は複座やからこれ位の人数は乗れるやろ。

* * *

エレノアSide

隠れ家に着いて直ぐにリガティとレイルを、アマルダで言う司教に診せる、ついでに神薙綾人の事も根掘り葉掘り聞かせてもらた……

「……モフモフやて?」

「そうだ、俺様の真の目的はモフモフするためだ!」

一瞬眩がした……そんな阿保らしい目的の為に、自分の世界をよう棄てる気になれたな……まあ気持ちも了解出来ない事も無いけど……はつきり宣言しようとで。

「「モフモフ？男やつたら（燃え）やろー。」

「「いやーモフモフコソが、男の道だつ俺様はモフモフの道を極めて見せるーー。」

極めんなーつ、男やつたら絶対魔獸は（燃え）やろー。

と激しいやり取りが始まつて、結局夢田姉さんに

「「ふーたーりーとーも天罰じゃーつー。」

と電撃を喰らつて、燃え&萌え討論はドローになつた……意識が薄れる中……綾人に燃えを絶対叩き込むとうちは誓つた……

サテラ対飛天將軍（後書き）

次回頑張ります。

誤字を修正しました。

キャラ紹介4（前書き）

味方サイドと敵サイドの主要キャラ紹介です。

かなり人数があるので、忘れない内に載せました。

キャラ紹介4

ルヴィア・フォル・ルゼット

外見（赤セイバーを参考にしました。）

年齢：18歳

髪の色：金髪

瞳：蒼

口調：悪戯っぽい僕

性格

悪戯好き

スキル

魔力：D

剣術：SS

俊敏さ：A

特殊スキル

三度落日を迎えても
(倒されても次に復活)

鷹の目

固定武装

ツイン・セイバー（双剣）

キャラ設定

好みの異性や同性をからかう困った人、小動物はかなり好、ある意味女性版綾人

ジユデッカ（コキュートス）

外見（ワайдアームズ2のジユデッカ）

年齢：18

髪の色：グレー

瞳：青

口調：僕

性格

冷酷無慈悲

趣味

気に入らない奴を撃ち殺す

スキル

魔力:D

技量:EX

俊敏さ:A

固定武装

短銃「ミリアム」

長銃「ダグラス」

必殺業

ホーミングブリッド（追尾弾）

アクセラ레이ター

キャラ特徴

コキュートス側の転生者

前世はなの知れたスナイパーだった、コキュートスのNo.・2であ

る。

テンションが上がるとトリガーハッピーになる。

キャラ紹介4（後書き）

次回頑張ります。

ジュテック（前書き）

ジュテックはワイルドアーマーズ2のボスを参考にしました。
誤字を修正しました。

ジユデッカ

アストリアSide

冬の階に着いた確かに周りを見ると雪が所々に積もっている、冬の階と言つのもあながち間違いでは無いだろ。

階の中で赤い貴族の礼服を動きやすくしたデザインの服を着た、女子に出会つ。

「ほつ……よつやくか、待ちわびたぞ転生者よ。」

「何故と聞くのは野暮だね……君も僕と同じだね？」

金髪の髪を纏め挙げて顔はうん……間違いない赤セイバーだ、しかも僕と同じ転生者だ……。

「ほう、君は中々の色男だな……ちなみに、僕は男も女もOKだよ

」

思わずたじろぐ……人に迫つてきて、人の顎に手をやり……だよ。

「残念だが……意中の人居るので……気持ちだけで十分だ。」

「アハハハ、君面白いね」

直感した……彼女は自身の楽しみのためなら、平氣で周りを巻き込むタイプだ……人間だった頃はさぞかしやんちゃなお嬢様かも知れない……

「そんな事より、敵の御大将の『』到着だよ。」

と言つて双眼鏡を渡してくれた……どれどれ……確かに身なりはジユーデッカだ……しかし顔立ちが違う、原作のジユーデッカは30代だが……目の前のジユーデッカはどう見ても18かそこらだ。

「奴も転生者だよ、それもイレギュラーメンバーさ」

なるほど奴もチート能力者が……気を引き締めて掛かるう。

＊＊＊

ジユーデッカSide

「さて、皆さんお楽しみの狩りの時間です」

「せつからく来たのに、帰つて来いだとよつ。」

赤いジャケットを羽織りバイアネットを担いでいる田つきの鋭い男が、話し掛けて来る。

「いらしていたんですか、ジェイナスさん？」

「ああ……慎一のラクドメゼキスとはいかねえが……ガルウィング？
で様子見だ。」

なるほど……しかし困りましたね……任務をほつたらかしなんて。

「ああ……例の隠れ家か、俺の部下連中に任せて来たぜ。」

本当に任せて良かったんですか？まあ何かあっても、僕には関係有りませんね。

＊＊＊

隠れ家

サテラSide

今アタシ達はてんてこ舞いになっているわ、コキュートスの制圧部隊がすぐそこまで来ているんだって。

「よし皆急いで【クイーン・エターナル】に乗り込んで！」

「綾人お兄ちゃんは？」

「ブラック・バハムートで戦うって言つてたよ。」

＊＊＊

「つおおおおつ！ブレードアタック！！」

ザクスピード見たいな戦闘機をブレードで切り裂く、まったく何機目だよつ、しかしザクスピードとはマニアックだな……一年戦争のヨーロッパでジオガ可変式Mで開発したとかしなかつたとかのモビルースだよな……て次は戦艦かよ……

この世界の空中戦艦らしい船の動力部をヒートダガーで突き刺す、あつさり黒煙を噴き上げ地面に不時着する。

変形して飛行モードから格闘モードに変わる、マリアベルさんに頼んで、ガンムハンマーを開発……いや、でかい鉄球に鎌を付けて振り回すだけだが、かなり使えるそこれは。

「大・回・転・鉄球なげー！」

忍者の鎌見たいに鉄球をブリッジに投げつける……早く斬艦刀出来ないかな、マリアベルさんに頼んだのだが……

『綾人一旦戻つてくれやー』

「どうかしたのか？エレノアさん？」

『どないも』ないもあるか！別動隊や、今そいつ等のデータ送るー』

「了解」

俺様のいない所で好き勝手しゃがつて今に見てるー、そう叫びな

がら一日隠れ家に戻る……

＊＊＊＊

隠れ家へ

サテラ S. e

「歯のもの準備は良いな？」

マリアベルさんが、地中潜航型「ゴーレム」の【キュベレイ】のマザータイプを起動させる。

マザータイプ「ゴーレムキュベレイ」、形状は巨大な乾電池型で頭部にドリルが付いている、量産タイプ「ゴーレムキュベレイ」はナノ・マシンで自己修復するが、マザータイプは自爆して消滅する、隠れ家の処分にはうつてつけの「ゴーレム」と言える。

「では、クイーン・エターナル発進じゃな。」

マリアベルさんの言葉に全員が頷く……此処からが踏ん張り所だ。

クイーン・エターナル鳥を彷彿させるフォルムの中型紋章艦、その船が今大空に舞い上がるとしている。

神薙綾人Side

隠れ家の山肌の一部が割れる……カモフラージュされた、クイーン・エターナルの発進口だ、さてと回りの鬱陶しい連中を片付けるか。

その時、マリアベルさんから緊急通信が入る……まあ恐怖のリサイタルの始まりだぜ！

急いで耳栓を耳に装備するこの耳栓も、マリアベルさんが開発した最強の防音性能の耳栓だ、今頃クイーン・エターナルの全員がこの耳栓を装備してる筈……

クイーン・エターナル号

ブリッジ

マリアベルSide

わらわの愛用のマイ・マイクを見つめる……しかし分からぬ……何故わらわが唄うと皆逃げるのじゃ？わらわのルックスはかなりの愛らしさがあるぞ、それにわらわの美声はかなりの物じゃぞ……でもわらわが唄うと言えば一斉に用事で忙しくなる……

今はそんな事を考える暇は無い人の家に土足で上がり込む輩にわら

わの美声を聞かせてやらねば……綾人がわらわに『奴らが来たら、
ボー……いやマリアベルさんの美声で酔いしれてやつて下さい。』
と言つておつたな……さてわらわのリサイタルの始まりじゃ

「 」 ～ 」

形容しがたい独特的の歌声が響き渡る……原作では彼女の歌声にモンスターが激怒して、強制バトルになるが、この世界ではド エ んのジ イ ア 並の歌声になる……

＊＊＊＊

神羅綾人Side

あの歌声はやつぱりジ イ ア リサイタルに近いな……戦艦二隻が一瞬で墜落か……いつその事『ラボで招待するか? そんな事を考えたら……

今ぞわつと寒気が来ちました……

クイーン・エターナルは無事脱出したな、隠れ家はマザータイプキュベレイの爆発で跡形無く消し飛んだ。

それじゃあ、アストリア達の援護に向かうか。

ブラック・バハムートは加速して「冬の髪」に向かう。

同時刻～冬の砦～

アストリアSide

「皆一つ、無理は絶対にするな！」

「「オーッ！」「

ルヴィアは打つて出るべきだと言った、僕は篠城戦で粘ると言ったが、それが出来なくなつた、理由は敵の増援……しかも機械竜ワイヤーが十機来るそうだ。

「なら……速攻でケリを着けよう。」

「そうだね……」

「行くぞ二人とも！」

ガレスさんが先陣を切る僕達も後に続く、ギガントやジャイアント・オーガが立ちはだかる。

「ナイン・ラインズ（射殺す百頭）！」

巨大な大剣で一体の巨人を瞬く間に片付け、向かって来る雑兵達に、

「ゲート・オブ・バビロン」で追い払う。

全く……乱戦なんて嫌だな……ガレスやルヴィアにバッサリなんてお話しに為らない……

そんな時上空に、あの「ゴーラード・ドラゴン」が現れる「キュートス」の部隊を薙ぎ払う！

「チツ……田障りなトカゲだなあ ドラゴンステーキにしてやる

長銃・ダグラスを構える、奴の狙いは彼女の額か……たせるかっ！？

「穿て！」

「フツ……ならじうだ。」

ジユテツカは瞬時に放った宝具を全て撃墜した……ツツ、なるほど流石に「キュートス」の幹部クラスだな……

「まあ、僕がトカゲを倒さなくとも……ほら」

ジユテツカにそう言われて、空を見上げる……なつ、ワイバーンの数が違い過ぎる、情報より3機多かつたか！？

「よそ見なんか……するから、馬鹿な田に合つんだよ君

「アクセラ레이ター！」

「うぐあつ！」

アクセラレイターだつて……今の油断とかそんなレベルじゃあ無かつたぞ。

「急所をわざと外す、あたり僕らしいでしょ」

「くつ……」

ジユデッカは狙いを僕の額に定めた、恐らく次もアクセラレイターで来る……神壁アースガズルが間に合えば勝機はある！

『アストリア！無事か！』

「綾人！？」

「チツ……しくじったのか？ジエイナス」

黒い機械竜^{ワイヤーバーン}が高速で接近して、変形後格闘戦で次々と敵のワイヤーバーンを撃破して、ゴールド・ドラゴンを助ける。

「まあ、貴方がた位いつでも潰せますよ、こちらは」

そう言つて空間転移するジユデッカ達、辛勝とはこの事だな……何だか一気に疲れが溢れ出す。

ゴールド・ドラゴンが僕達の近くに舞い降りる。

「申し訳ありません、貴方がたを、助けるのが逆に助けられました。」

>

「所で君の名前は？」

人型に変身した彼女は何処となく、ドラゴンセバーのシアに似ている。

「自己紹介がまだでしたね、私はソニアと申します。」

「僕はアストリアです。」

「ボクはルヴィアだよろしく誇り高い竜族のお嬢さん。

「俺はガレスだ。」

それぞれ自己紹介を終える、そして黒いワイバーンも地上に降りて来る、やがてパイロットと思われる人物が現れた。

「皆無事だったか？」

「誰だい、君は？」

「神羅綾人だよろしくな！」

するとルヴィアが綾人に近づく、まさかナンパする気か！？

「君は僕に近い雰囲気をもつてゐるね？」

「俺様も何だか君に親近感を感じるぜ。」

？？？……とにかく聖女の保護も成功したし、早くこの国から脱出しちゃう。

無事メンバーと合流しこの国【ヒルドア】を離れる全ての国名はガレスさんに教えて貰つたし残りの【仲間】を必ず見つけ出していくぞ。

ジユデッカ（後書き）

次回頑張ります。

更新が遅れた事をお詫び致します。

番外編無人島の燃えと燃えバトル！？（前書き）

執筆が遅れましたが、PV3000記念です。

今回かなり、ギャグに走りました。
誤字と描写を修正しました。

番外編無人島の燃えと燃えバトル！？

神羅綾人Side

クイーン・エターナルは今とある無人島の近海に着水している、船体整備と食料調達の為だ。

俺様のモフモフとルヴィアのなでなでは、かなりの物だな、まさか俺様より先に夢月さんをなでなで陥落させるとは……ルヴィア、モフモフ大会に参加していたら……俺様の優勝無双はなかったかも。

＊＊＊

同時刻：クイーン・エターナル号内通路

エレノアSide

綾人やルヴィアか……二人とも、前世は同じ世界の出身やろか？……ついに夢月さんもルヴィアに陥落したしな……ソニアは『私の身体（ドラゴン体型）は大きいから、クイーン・エターナル号が沈みますね』で綾人をあしらつたしな……

ルヴィアは優しくふあふあやけど、綾人は……ドン引きや……

「あ～あつ、こんな事やつたら、セバスチャンさんやミナと食糧調達班に参加するんやつたな……」

今、乗員の半数は船体の整備か食糧調達に別れどる……戦闘要員は休んでるしな、うちも久しぶりに海で泳ぐ事にして水着姿やけど、ガレスは食糧調達班についててしもた

「ハア～～つ、ガレスにうちの可愛いい水着姿見て欲しかった。」

「ハレノアさん、どうしたの？」

サテラがアストリアと一緒に声をかけて来た、ちなみにアストリアは宝具の【釣りセツト】を持つてテツキに行く途中や、金ぴかん釣竿やけど性能はどの釣竿も追従出来んらしい……

「サテラちゃんは泳ぐん？」

「はい、でも、お兄ちゃんは……」

「僕は、金づち……だから釣りですね」

意外な事実発覚！？我等がリーダーは金づちやで……それで釣りか。

「 そうか、ほなうちほフユイヤルフユと遊ぶ事にするわ」

人に軽い挨拶を済ませてから「エイドルエモ探しに行く

六
六
六

同時刻・甲板デッキ

ルヴィア Side

夢円さんのモフモフ……いいな～つ、やっぱり本物の魔獸は違う ふふ……ブラッシングであつさりと陥落だもんね～

「ふあああつ～～ 中タルヴィアはブラッシングが上手いの～～

「じゃあさ……綾人にモフモフも頼んで良いよね？」

「綾人か……あの飢えた野獸の様な面構えを見たら、ルフェやフェイを毒牙に掛ける訳にはいかぬ」

「あははっ、確かにね、前にモフモフして貰つたんだよね?…どうだつた?」

綾人のモフモフは侮れない……あのテクニツクは神がかつて……そう、あの総ての動物を愛し知り尽くした、動物学者さんのようだった。

「危うく陥落しかけたぞ、しかし、あの顔では陥落はしてやれん……もう少し紳士的なら……な」

あははっ、そうだね、綾人のモフモフ顔は半獸人の人達は勿論……皆に第一戦闘体制扱いだからね

エレノアさん発見～～！（何か面白くなりそうな予感だね～）

＊＊＊

フェイヒルフと二人で遊ぼうと思つていたら、永遠のライバルエレノアさんと鉢合わせだ、どうやら向こうも同じ目的らしい。

「なあ、綾人、ルフとフェイ知らんか?」

「何だ、エレノアさんも探してるので……モフモフしようと思つてたんだけど……」

俺様の言葉を遮り、挑戦的な顔で俺様に話掛けるエレノアさん。

「やつぱり燃えに目覚める氣い無い?」

「全く・全然・これっぽちも・無い!…」

溜め息混じりで呆れるエレノアさん……ちよつとムカつくな。

「綾人……男やつたら【燃え】や!」

「エレノアさん……女の子だったら【萌え】だ!」

討論バトルでは決着が着かずに、俺様とエレノアさんは賭け事を切り出した。

「よーし、じゃあ綾人うちが勝つたら……燃えに目覚めるか?」

「じゃあ俺様が勝つたら萌え&モフモフメイドさんやるか?」

ようやく一人を発見したと思つたら、バチバチと目線がぶつかり火花の飛ばし合いが起きている。

「やれやれ……ビーチバーेに誘つて来てみたら……いつその事砂浜でやらない？そのバトル？」

（ふふつ、燃えも萌えも良いけど、この一人飽きないからね）

「バトルつて……モフモフバトル？そんなバトル有るわけ無いやろ？」

疑惑の眼差しで俺様を見るエレノアさん、しかし俺様は胸を張り答える

「何言つてんだ？エレノアさん、俺の住んでいた世界には実際にあつたぞ。」「

エレノアさんの目が点になる、構わず俺様は説明を続ける。

「転生する1年位前にもあつて優勝したからな。」

「どんな競技や？」

胡散臭そうな顔で尋ねるエレノアさん。

「まずは100匹の様々な種類の動物をいかに早く愛でて昇天させるかを競つて、予選を通過した者達によるタイマン勝負トーナメントをやつて最終的に残つた1人が優勝と言うものだ。」

「それ、最初だけで後はただの格闘技大会やん！」

「強敵だらけだつたぜ、特に 県から来たつて言う女子高生がか

なり強かつたな、目にも止まらないジャブを連続でかましてきたからな、愛で神モードで強化された状態でもあれはやばかつたぜ、最終的に愛で神フィンガーで相手の頭を掴んで昇天させて勝ったがな。

「

はへへっ、と溜め息が聞こえたがスルーだ、ルヴィアは、是非参加したかつたなと言っていた。

「こいつは激しいバトルになりそうだ、だが、最後に勝つのは萌だ！」「

「な、何言つてんねん！燃えが勝のに決まつとるやん！！」

「ちなみに俺が勝つたら、エレノアさんにはモフモフ状態になつた上でメイド服を着させて船のクルーの人達にご奉仕してもらおうかな？」

「の、望むとこりやつ、綾人……漢おとこに一言わ無いな？」

「ああ、モフモフの神様に誓つて」

ルヴィアがニヤリと笑う……

（これで退屈しなくて済みそうだ。）

二人は浜辺に向かう、決着をつけるべく。

浜辺

俺達は西部劇のガンマン見たいに対峙する。

何時もより真剣な顔のエレノアさん……絶対に負けられない……

「綾人……今日こそあなたに、魔獣の「燃え」を教えたる……」
「エレノアさん……今度こそ、モフモフの素晴らしい身に刻んでやるぜ！」

二人同時に、攻撃をしかける。

「いくでつ、神薙綾人！」

「いくぜっ、エレノア！キング・オブ・モフモフの名に掛けて！」

（絶対に負けられない……最後に勝つのは萌だ！！）

ルヴィアSide

二人が、熱いバトルを始めちゃったから、マリアベルに頼んで、彼女の使い魔（精神感応デバイス）アカ&アオにホログラム中継を頼んだ、勿論実況中継はこのボク

『ミッドグランド第一回キング・オブ・モフモフ又は燃え決定戦が

開始されました！司会及び実況中継はルヴィアがお送り致します。』

開始早々、激しいバトルが展開される、エレノアはバ、ゼットと葛木先生を合わせた感じのアーツ系だ綾人は、うんプロレスと空手かな？互いに引けは取つていない。

『両者とも、素晴らしいバトルを繰り広げています。おーーと、綾人がエレノアに空中から襲い掛かる！エレノアさんピーチ！！』

と、思つたら風の魔法で後ろに下がる、あまりの速さに一瞬足にローブレード履いてるのか？と思つた。

「エレノアさん……あんた足にローブレードもしこんでもるのか！？」

「うんな訳有るか！風の法術に決まってるやろ！」

綾人はエレノアさんを一瞬サイボーグと……本氣で思つたらしい……

再び再開されるバトル、実況中継の続き 続きへ

『コホン、大変失礼を致しました。あまりの予想外展開に、思わず見とれてしましました。さあ、今度はエレノアさんの反撃開始だーー！今度は綾人がピンチー！どうする？綾人！ー！』

＊＊＊

「どうするもこうするも無い…… 良しあの力 見たいに、ノーガード戦法だ…… ハレノアさんに、俺の作戦の不気味さを見せてる。

しかし、この戦法は不慣れな奴がすると一撃で撃沈される…… よつぽどの事じゃあ無いと切り札に為らないだよな……。

さて見せてもらひ、ハレノアさんの実力をな。

エレノアSide

いきなり、両手だらりんと下げて、不敵に笑う綾人…… 隙だらけなのが、反つて不気味やな……

此処であいつの懷に飛び込んだらヤバいな…… ロングレンジから仕掛けるか。

「いくでー、氣弾ー！」

文字通り【氣】で出来た弾を綾人に撃ち込む、しかし、見事に避けるな綾人実戦で敵に回したく無い奴や。

「飛び道具つて、反則だろつ、いや技だから今のは有効か。」

「まあ、飛び道具の表現は間違ひ無いで」

と、言いながら次々と氣弾を放つ、良し、このまま綾人のスタミナ切れに持つて行こう

「だあああつ！かめ め波のマシンガン攻撃はやるなああつ！」

あの、かわしかた……マトリ クスだ！この世界が人間界なら、DVD見直すな絶対に。

『綾人つ、まさかの超高速回避でエレノアさんの攻撃をかわしきつたーーっ！な、なんとーーっ、エレノアさん今度は飛び上がつたつ、綾人もそれに続いて、空中でバトルを繰り広げていますつ。』

ルヴィアSide

マトリ クスの次はドラゴ ボ ルのノリだね～～ しかし落下しながら組み手状態……一人とも良い……凄く良いよ

そして、二人とも揃つて砂浜に着地した時、地響きと共に巨大な蟹が現れた！ジャイアントクラブは巨大な陸蟹だ。

「デュカイ蟹だなあ……」

「馬鹿、感心してる場合か！？」

「せやな、恐らく……この島の主^{ヌシ}やな」

綾人がラグナシアブレードの一ノ刀流で蟹を止めにかかる。

「十字斬りでどうだーーっ！」

蟹の脚を斬り飛ばすが……やつぱり短剣レベルでは、きついな……
僕も加勢しようか？ そう思つた時が綾人工レノアさんに話掛ける。

「エレノアさん、俺達の合体技を見せてやろうぜー！」

「せやな、一丁派手にやつたるか？ 綾人」

一人の腕が光り輝く、まるで ガンのノリだな。

「俺のこの手がモフモフさせると囁きかける、かあいい者を愛で
ろと雄叫び上げる！」

綾人の腕には肉球の紋章が浮かび上がる。

「つかのこの手が烈しく燃える、新たな燃えを掴めと雄叫び上げる
！」

「モフ」

「燃え」

「「燃え萌えふいんがあああつーー！」」

そして巨大蟹に向かつて放たれる、シャーニング
フィ ガーもどき。

蟹の甲羅にかなりのダメージを与えるがびくともしない。

「やっぱり本家じゃないと無理か……」

「何を言つてはいる、これからが俺達の真骨頂だぜ」

「ほな、もう一丁行こかっ」

エレノアさんが綾人に氣弾を放つ、しかし綾人はそれを自身に吸収する、とんでもない二人だな……

「この敗北は誇つていいものだぞ！肉球という素晴らしい物を刻まれて天に召されるんだからな。」

まさか……アレを決める氣か！？

「うちのこの手が真っ赤に染まる、新たな燃えを掴めと雄叫びあげる——」

「俺のこの手が愛でると囁く、新たなモフモフ極めろと囁きかける

「萌え・燃え電 弾——」

エレノアさんが綾人を弾の様に放つ綾人はスト のベ の必殺技【サ 「ク ッ ー】の様に両腕を前に突き出し巨大蟹に向かつて砲弾の様に撃ち出された。

「綾人——、逝つてこいやああああつ！」

「てつ、漢字が違う」

「喰らえつ愛で神モフモフフィンガ——つ」

ジャイアントクラブの腹に大きな肉球の穴が空き巨大蟹は倒れた。

「モフモフは勝つたぜ」

「いや、燃えの勝ちやな」

と喧嘩が始まる、何時もの事だからスルーしようつと

蟹は缶詰にして保存したし、残りは皆で蟹づくしだったね

番外編無人島の燃えと燃えバトル！？（後書き）

次回頑張ります。

エルザリア商会（前書き）

執筆が遅れましたが、次話更新しました。

ようやくアストリア達が仲間と合流しました。

エルザリア商会

アストリアSide

突然救難信号がクイーン・エターナルに入つて来る、距離は近いな、良し救援に向かうか？

「エルザリア商会からの国際救援信号を受信、相手は……空中海賊と『キュートスです！』

空中海賊と『キュートスの襲撃？何か裏が有りそうだな……

「お兄ちゃん」

サテラに田をやる瞳にはある種の決意がある……因縁のある『キュートスや海賊に狙われているなら、早い方がいいだろ。

「うん、やひひー。」

「宜しいのですか？アストリア様」

勿論迷う必要は無い、僕は静かに旨に宣言した。

「これより、僕達は空中海賊「フリーダム・ウインドウ」として活動を開始する！！」

「「オ———ツ！——」」

「うして僕達は空中海賊フリーダム・ウインドとして活動を開始し

始める事になった。

アルバートSide

海賊とコキュートスの艦隊か……厄介だな。

「会長……全護衛艦配置完了です」

「分かりました、敵機動兵器の動きに注意して下さい。」

「了解です」

通常の護衛艦で持ちこたえられれば問題は無いのだが……

「アースガズル3を輸送船の周りに展開して下さい」

「了解です、会長」

アースガズル3転生者の協力を得て再設計された空中戦仕様のゴーレム、アースガズルにフライトユニットを装備させた機体で強力なビームキャノンを装備している。

やがて向こうから通信が入る……投降勧告か？

『アルバート会長、そろそろ降参してはいかがですか？』

「……アズラエル理事、もし降伏したら半獣人の難民の安全は保証してくれますか？」

『それは、無理な相談ですよ、アルバート会長さん何しろ彼等は私達に刃向かつたのです、一度許してしまえば、ただ付け上がるだけです、まあ……僕の方が優しい事にはかわりません。』

「……どういう意味です？」

『つまり、皆さんに此処で死んで頂きます。』

『なるほど……それで【優しい】か、なら私も私の【強さ】を示さねば』

『丁重にお断り致します、彼等の保護は世界条約に基づいて行つております、そして我がエルザリア商会もその世界条約に批准いたしております』

『綺麗事ばっかり並べる奴は嫌いだな、そだら？アズラエル』

『ええ……間桐君の言う通りですね、アルバート会長、もう少ししゃ話をしたかったのですが時間切れです。』

「ツツ……」

前方に海賊と『キュー・トスの混成艦隊……旗艦は【ドミニオン】、そして後方からは『キュー・トスの高速機動艦隊と旗艦は【ラグド・メゼキス】がゆっくり迫つて来ている。

「会長、……」のままでは

「輸送船を護りつつ空域を離脱します」

「了解しました」

船団は輪形陣を執るしかし現実は、甘くは無かつた【ラグド・メゼキス】が恐るべき速度で船団に突つ込む、護衛艦がその機動力に驚き陣形が崩れ始めた。

「クッ……アースガズル対応出来るか?」

「ダメですっ、相手のスピードが出鱈田ですーー！」

ラグド・メゼキス……この世界に存在しない、イレギュラーの超兵器……厄介と言つより悪夢だ……

その時ロンバルディアが……いや黒いワイバーンが、ラグド・メゼキスに襲い掛かった。

『フリーダム・ウイング』のエース神薙綾人參上だぜつー！』

「フリーダム・ウイング……よく解らないが味方だらうか?」

「フリーダム・ウイング? 聞いたことの無い名前だな……新手の海賊か?」

「後方より、レジスタンス軍接近します」

あれは……クイーン・エターナル号か? だとしたら……彼等だな、

助かつたな、私は彼等に連絡を取ることにした。

アストリアSide

『いきりは、エルザリア商会貨客船「スター・ライト」号、貴艦のご支援感謝いたします。』

「いきりは、自由海賊【フリーダム・ウインド】です、これより貴船団の援護に移ります、脱出を優先してください」

僕達は、船団の護衛に入る……セバスチヤンさんやアイリスさんの話では父さん達が生前、色々と世話になっていた商会らしい。

「ドリード・オング、接近して来ます」

「ドリード・オング……？確かにあのドリード・オングだ、しかしあの艦体の四つの突起は何だ……？」

確かに……地球連合の戦艦でアークエンジールの一番艦だった艦だ、と言つ事は乗つてゐるのは……と考えていたら、向こうから通信が入る。

『誰かと思えば、成る程……やはり生きてましたかアストリア君?』

ムルタ・アズラエルのそつくり……いや、転生者か？

「ええ……何とか無事でしたよアズラエル理事」

「気付かれない様に、紋章砲の発射準備を命じる……あのドリードのオノンは何か違う感じがする……」

「先制砲撃開始！！」

艦首の紋章砲から、レーザー状のエネルギー弾がドリードに向かって放たれる、しかし命中直前に球体状のバリアに弾かれた。

「まさか……アルテミスの傘！？」

あらゆる攻撃を無力化するバリアだつたな、あのシステムは厄介だな。

『無駄ですよ、この傘は特別製です』

（チッ……あのシステムは展開中はお互いに、何も出来ないだよな……）

「敵海賊艦隊接近！」

「ドリードのオント距離を保ちつつ応戦せよ」

「お兄ちゃん、アタシが出ようか？」

「いや、ルシファに迎撃させよう、綾人に連絡して」

「了解」

神薙綾人Side

チツ、ラグド・メゼキスの一等辺三角形め、此処が宇宙なら、勝ち目が無いのは分かつてゐるが……あの慣性チップは厄介だな、まるで無人機のハリアーの戦艦バージョンだ、あーーーっ、ちょこまかとウザつたい！！

「ダーアーツ、ちょこまか、ちょこまかと動きまくるなーーっ！」

『はははっ、どうだい？僕のラグド・メゼキスのスピードは？最高だろう』

チツ……ワカメ見ないな声の奴だな……まさか。

「まさか、間桐慎一か？」

『半分正解、でも惜しいなっ、まあ、僕が転生者だとしたら……どうする？』

と言いながら、レーザーを放つて来る。

アニメ版じゃあ無くて小説版の一等辺三角形で助かつたぜ。

しかし、ここの状況は少しまずいか……輸送船団の被害は少しづつ出始めている、アイツ等が自己中ワカメとワンマン理事なら付け込まれるんだが……そんな、そぶりも見せない。

レスター Side

船団の救援にロンバルディアと一緒に向かつたが、間に合わなかつたか……

「船団の被害は今のところ護衛艦だけね」

「まずは、敵海賊艦隊から始末する、リープ・レールガンを近づいて叩き込むぞ！」

「了解」

ソード・ブレーカーの速度を上げ海賊艦隊に近づき、リープ・レールガンを叩き込む、リープ・レールガンは目的に命中するとその部分をえぐる様に空間転位させる兵器だ。

たちまち海賊船が四隻が真つ一つにへし折れ爆発する、そしてロンバルディアがラグド・メゼキスに襲い掛かる、黒いワイヤーバーンは味

方の識別だから連絡を入れておけば同士討ちの可能は低いだろう。

「黒いワイバーンから通信よ」

「解った、さつそく回線を開いてくれ」

『援護助かつたぜ、俺様は……つてお前……』

何だよ、いきなり……ってモフモフ転校生！？」

…… サテラいや真琴…… よりによつて…… モフモフ転校生が向こうにいたのか…… 大変だな

「ホンとラグド・メゼキスはさうと撤退を開始し始めた。

取り敢えず俺達のアジト、いや拠点に案内するが」

宜しく頼む

『正角です レフタ君』

さて……リーダーに報告をするか、取り敢えずこちらの転生者と合流成功と暗号で知らせる、真琴や総一郎さんに会うのはひさしぶりだな。

エルザリア商会（後書き）

次回頑張ります。

「キャラートス（前書き）

今回は敵対組織の視点にしました。

? ? ? P.i.e

私は目覚めた……此処は何処だろ……それにさつきから頭がズキズキと痛む……不意に人の気配を感じた、誰か居るよ’つだ。

「隠れてないで、姿をみせる……」

「ふうん、気配は分かっちゃうんだ?」

白髪の少年が私の前に現れた……そう、まるで幽霊見たいに。

「此処は何処だ? 何故私は此処にいる?」

「そうだね、僕はこの組織【キьюートス】のリーダーとだけ、言つておくよ、お嬢さん」

優男は穏やかに、私に話しかけてくる、なるほど人さういか?

「それ、以上の悪党ですよ、僕達は」

! ?思わず身構える、私は今丸腰だ、壁を背にして武器に成りそうな物を探す。

「まあまあ、落ち着いて下さい、別に危害は加えませんよ」

相変わらず、穏やかに接してくれるが、私の本能が【この男は油断出来ない、絶対に信じるな!】と叫びている。

「それより、貴女のお体は大丈夫ですか？」

鏡を私に手渡し優男が尋ねてきた、その一言に始めて気がついた、まず頭の髪の毛が狐の尻尾みたいに金髪なつていて毛先が少し黒い、それから瞳が紅い……私つて人間のハズだ……私は男を睨みつける。

「貴様つ、何かしたのか！」

自分で張り上げた大声に始めて驚く、私は、かなり穏やかだった筈だ、こんな男つぽい言葉遣いは……そこまで考えていたら頭痛が激しくなつて、たまらずにその場にうずくまる。

「大丈夫ですか？……つてさつきからこの台詞ばかりですね……では、簡潔にご説明します、貴女はこの異世界【ミッド・グランド】に召喚された転生者です、勿論、僕達も貴女と同じ元転生者ですよ」

「？？？」

転生者？異世界？全く訳が解らない……それに彼の事が気になる、無論前に居る優男では無く、人間の【彼】の事がだ。

その時、優男がさびしげに一言告げる。

「残念ですが、総一郎さんはお亡くなりになりました、彼を殺した犯人は、この世界に居ます」

！……殺された、誰に？気がつけば優男の両肩を引っつかんで、揺すつっていた。

「総一郎は誰に、殺されたんだ！…」

「ゲホッ、ゲホッ、お、落ち着いて下さー！」

優男は、私の両腕を振り払つて咳き込む、そして私に一枚の写真を見せる。

「この、男と女は？」

「彼の名前はアストリア、そして総一郎さんを殺したのは妹のサテラです」

聞いた事の無い名前だ、しかし……何だら？この一人の写真を見ていたら昔会つた気がする。

「貴女には、この一人を倒して貰いますよ、シャオムさん」

「…シャオムだと、私の名前は、霧島優子だ」

しかし優男は、ふざけた仕草で、『転生前の名前は、この世界では無意味です』と放つ。

「……いいだろ？、だが私は何故転生したのか、全く解らない」

「それは、僕が貴女の魂を呼び寄せました、つまり総一郎さんが無くなつた時貴女も巻き添えになりましたので、無理矢理こちらに転生させました」

なるほど、それなら納得がいく、しかし私は誰の指図も受けたつもりも無い。

私は踵を返して、優男に冷たく言い放つ。

「私の邪魔は誰でもうつともするなつ」

「ハイハイ、解りましたよお嬢ちゃん」

軽く更に人を小馬鹿にした声がする。

赤いジャケットの男がまるで、からかう様に言つた後近づいて来る。

「ジエイナスさん、お早いお帰りですね」

「ああ、あのガキ達にやられたぜ」

「あの、ガキ達?」

「誰の事だ?」

「アストリア達をわざと逃がしましたね?ジエイナスさん?」

優男が鋭い眼差しで、ジエイナスと呼ばれた男を睨みつける。

(ーーーわざと逃がしたつ)

その言葉で、私の頭の中で何かが弾けた。

「貴様つーーアストリア達をわざと逃がしのかつ!」

ジエイナスとの距離は約2、30メートルは離れていたが自分でも

驚く様な速さでジョイナスの首を左腕で締め上げる。

「ぐあ、お、落ち着けって」

「そうです、まずは休まれてはどうですか？シャオムをと」

一人は口々に話し掛けてくるが、私はジョイナスを床にたたき付け、静かに睨みつける。

「……優男、私の武器は？総一郎の敵討ちがしたい」

「では、この剣を仕込み杖にしますが魔剣の一つ妖刀ムラマサです」

妖刀ムラマサ……この世界でもあの【村正】が存在するのか、魔人を殺すにはちょうど良いだろ。

私は、仕込み杖を手にすると、その部屋を後にした。

??.?.Sude

やれやれ、上手くじつけられて誘導出来たかな？

ジョイナスに手をやるとじばらへ床に動けないフリをしていた。

「やれやれ、元気なお嬢ちゃんだぜ」

「半分は身から出た鎧ですよ、ジェイナス」

皮肉をこめて僕は、ジェイナスに言ひ。

「しかし……使えるのか？ あのお嬢ちゃんは？」

「総一郎がアストリアと氣付かない様に彼女に細工をしました。そう、彼女にアストリア達の始末をさせる為にわざわざ魂に細工を施した、もしもの時の保険になるだろつ。

「しかし、えげつないねえ……元【恋人】に命を狙わせるなんて」

「別に、よくあることですよ、【悪党の組織】には

成功すれば良し、失敗すれば、その時は別の策を使つまでです。

「さて、アズラエル・慎一・シーマに連絡を、我々もかねてからの各方面諸国侵攻作戦を行います」

「なるほど、アストリア達はお嬢ちゃんに任せて、こちらは勢力の拡大か、相変わらずやり手だね、アンタは」

ジェイナスの皮肉を受け流し、僕もこの薄暗い部屋を後にした。

「キュートス（後書き）

次回頑張ります。

銀の魔女（前書き）

ようやく、サトウのレベルアップをするキャラの登場の話が出来ました。

誤字の修正をしました。

銀の魔女

アストリアSide

目的地にようやく着いて、アルバート会長やレジスタンスのリーダー達と会議をした、僕達フリーダム・ウインドウは近くの無人島に拠点を構えた、それから半獣人の人達も僕達の拠点に移動させた。

最初にしたのは町作りが主な仕事だった、しかもこの島には船の装甲板になる鉱石等の資源が有った、当初は半獣人達の受け入れと資源確保に目を付けていたらしいが、僕達が早く来たので、この島を任せると決まった。

財政管理はセバスチャンさんに任せ、僕等はしばらく交易と島の付近の防衛がメインになる。

「それにしても、銀の魔女か……」

紅茶を飲みながら、交易所で、とある商人から買った情報だ、無視は出来ない。

「サテラと目が合つ、どうやら同じ事を考えていたらしく……」

「もし、噂の魔女にアタシが弟子入りしたら、戦力アップになるね

」

しかし……いきなり尋ねて『弟子にして下さい』は無理だろう……諸葛亮孔明も【三顧の礼】があつたし……まして相手は、この世界のかなりの魔法使いだ……

(難しい交渉になりそうだな)

サテラとは違ひ気分は重くなってきた。

……………

いきなり、冥王様に呼びだされた、また何か厄介な問題でも起きた
か気になる……

扉が勝手に開き、急いで黄金の間に入る。

「はあ、はあ、…………・サンダルフォンただいま参りました」

本来なら臣下の礼をとらないといけないのですが、冥王様の険しい
表情は水晶玉に写った相手イリアス様に向けられていた。

「イリアス……先ほどの件は嘘では無いよね？」

「はい、嘘ではありません……」

「まいったな……イレギュラーの報告は聞いていたけど……アスト
リア……いや聰一郎の彼女の事は全く予測できなかつた……」

「ええ……彼女はやはり……」

「恐らく……【奴】の仕業に違いない！」

冥王様の殺氣だった声に思わず『ひつ』と齧えた声が私の口から漏れた。

「ミミ、怖がらせてゴメン……」

「いえ……それより」用件は？

声がかされたが、気にせず本題に入る、時間は余りなさそうな雰囲気だからだ。

「君の先輩のジブリールから連絡が来た……応援が欲しいそうだ……」

ジブリール先輩から！？ジブリール先輩は元ミッドグランドの魔術師で、冥王様に弟子入りして人の身で魔人に転生したとんでもない人だ……何でも『人間では限界なので魔人になつてでも魔法を極めたい』と言って、魔人になつてしまつた……

「ジブリール先輩はなんと言つてました？」

「ミッドグランドをこもるの世界に送つて欲しいそつだ……」

私がミッドグランドに行つて大丈夫ですか？冥王様、そんな考えが頭を過ぎる……

「ミミ、向こうでは、控えめにね

「なにがですか？」

笑顔で冥王様はとんでもない事を口にする。

「向こうの世界で、ナンパばかりはダメだよ～」

「ナンパばかり……て、いつの間に、魔法陣敷いていたんですねかあああっ！～」

「うひ～て私はミシングラングに転移させられた。

＊＊＊＊

優子Side

転生して、しかも名前をシャオムと呼ばれたが、[冗談出はない]…私は私だ！

取りあえずコキュートスの船に乗つて、フローダム・ウイングのクイーン・ヒターナルを探している。

「シャオム様、目標を補足致しました」

「ああ、分かった、だが私は【優子】だ！その名前で呼ぶなっ！」

「も、申し訳ございません」

「フン、目標は近いな……なら私が相手をしよう」

踵を返してブリッジを出ようとすると部下に呼び止められた。

「艦載機を出されでは？」

「ザ」に私の獲物は譲らないつ

聰一郎……真琴必ず敵を私が取るやる……

そう誰にもあの一人の首は渡さない。

私はすぐに船から飛び出した。

サテラS.i.d.e

レーザーに反応があった、全員がすさまに配置に付く。

「アリシア、敵の数は？」

「はい、一人だけの様ですが……魔力の反応は魔術師以上です」

「なら、アタシが相手をするわ」

ソニアさんとお兄ちゃんは輸送船の護衛に、綾人はブラック・バハムートのメンテナンスと新装備のテストで留守番だし……

「クイーン・エターナルだけで単独で偵察はまずかつたかな……やっぱりレスターに来てもらつた方がよかつたかな？」

「ぼやいても始まらない、ロンバルティアのパイロットのヴァージニアさんとジョットさんは、次の作戦まで待機メンバーだし……レスターは別方面の偵察に出でている。

「一人なら、わたしだけで対応出来るわね」

「サテリさん、余り無理しないで下さい、此処は一旦退くべきです」「ダメよつ、新アジトを教える訳には行かない！」

思わず、きつく言つてしまつた。

「……『メン』」

「私こそすみません」

しかし、魔人レベルか……弱いタイプだつたらまず複数だよね、時間稼ぎをして、素早く回れ右なら大丈夫、後は臨機応変に行動しよう。

クイーン・エターナルから勢い良く飛び出す、まずは先手必勝で行く。

「カラード・ボルグ？」

螺旋剣を放ち、素早くポイントを移動する、しかし相手はアタシの

【矢】を、あらう事が切り裂いた。

「嘘つ、あれを切り裂くなんて……」

「なるほど……要注意の攻撃だな」

敵の外見は、シャオムさんぽいけど……なんか殺氣剥き出しで怖い……しかもかなり卑い。

「今度はこっちの番だ」

不気味な剣で切り掛かつて来る、咄嗟に蛇腹剣で防ぐ、刃がぶつかり火花が飛び散る、一旦離れるか、そう思った瞬間相手が魔弾を放つてきた。

「くつ……」

今の零距離攻撃でかなりダメージを受けた……マントを投げ捨て身軽になる、しかし相手の剣の構え方が気になる……

「その構え方は何処で?」

「うちの道場で覚えたわ、サテラ……ああ、聰一郎と真琴の敵討ちをさせて貰つわ!」

「まさか、優子さん!?でも、どうして……」

「敵と仲良くなじゅべりをするつもりは無い!」

あの構えは居合だ……彼女が空中を翔ける様に飛ぶ、咄嗟に防ぐつ

としたが脇腹に、痛みを感じる……斬られたみたい……

「……つう、信じてもらえないかも知れないけど……アタシは、伊集院真琴よつ」

「……ふざけるなつ、今すぐに冥界に送つてやるつ

まさに火に油だ、優子さん完全に頭に血が上つてゐる、仕方が無い……イチバチで宝具の【ルールブレーカー】を使う、もしあ兄ちゃん達が、呪いのアイテムに掛かつたら大変だと思つてその対策として用意しておいたのが役に立つ。

でも、この短剣はかなりショートレンジに近付かなければ意味が無い、接近戦に持ち込むしかない。

彼女も剣を構え直して、こちらの動きを伺つてゐる……

目を閉じ精神を統一して呼吸を整える……チャンスは一度きり、次は無い。

「……そんなナマクラで私に挑むか?」

「ナマクラがどうか試して見なさい!」

互いに高速で接近する、その時、斬られた脇腹が痛み、僅かにルルブレーカーの刃が逸れ彼女の右腕を切り裂く。

「つあ、こんな……手傷で負けるものかあつ」

左手に拳銃を構えて、こちらを狙い撃つ……アタシは胸を撃ち抜か

れて、そこで意識が途切れた……

＊＊＊＊

優子 Side

「はあ、はあ、よつやく真琴の敵を討つた……」

【職】のサマリーハーマンの息を着けたいたりムリヤリの右腕の傷を魔法で回復させ、一息も着けないで済んでしまう。——が、聴こえてくる……

「剣風情がつ、主に逆らうがあつ、うつ……ぐああああつ！」

頭が割れそうだ……気持ち悪いよ

(そ、聰一郎たすけで)

激しい頭痛が、する中魔力を感じ取ると周りが雷球に囲まれた、そう思った瞬間、辺りは激しい爆発と閃光に包まれる。

下を見ると、法衣を纏つた女魔術師が、サテラを抱き抱えて、こちらを見ていた。

＊＊＊＊

リレイアSide

海に向かつて落下する、女の子を空中で受け止め相手を睨みつける、全く……私は隠遁生活をして約一百年間此処は静かな場所だった、助けた女の子の顔を見ると少し呻いている。

「さて、この娘はひとまず私が預かるわね」

「一体何者だ、貴様は？」

「え……私を知らないなんてモグリもいい所だわ。

「そうね、自己紹介は【銀の魔女】と名乗るわ

稻妻の短槍を六本出現させて、彼女に放つ、命中より氣を逸らし、素早く離脱する。

短槍をかわしながら、相手の罵声が耳に入る。

「逃げるかっ、卑怯者めつ

「三十六計逃げるが勝ちよつ」

今は怪我人を助け無いとね、あんな物騒な子の相手は何時でも出来る。

隠れ家にたどり着くと、使い魔のミコが出迎えてくれた。

「マスター、その方はは？」

「多分、イリアス様が言つていた【転生者】ね、だつて特長が同じだもの」

「可愛いお嬢さんですね」

「はいはい、冗談は後回し今は怪我人の手当が先、後彼女に私の服を用意して」

「分かりました、マスター」

そうつって、うやうやしく、頭を下げるミコ、飼い主に良く使い魔は似てるで言つけど、誰に似たんだか……

彼女を抱えて、治療の為私の寝室に運びこむ。

長い夜になりそうね……

サテラS·ude

「ほんやうと意識がする……

「サテラ、起きなさい……」

静かに私を呼ぶ声が聞こえる、誰だろ?身体を起こして辺りを見回すと、大きな鎌を持つ葬儀に参列する黒いドレスの女の子が私の前に立っていた。

「貴女は誰ですか?」

「夜の安息と死の運び手の女神【ルエル】よ」

ルエル……生きる者達が死を迎える時、彼女が現れてその者達の【魂】を断命の鎌で刈り取る死の女神……

「そつかあ……アタシこれで一度目何だね」

そう、彼女が現れるのは「くなつた者達の前にしか現れない。

「はやとちつね、サテラは」

「?でも、此処は【あの世とこの世】の境目でしょ?」

「ええ……でも貴女はまだ死んでいないわ」

「? ? ?」

なら、何故、彼女が私に会いに来るのだろう?

「姉の女神イリアスが会えないから、私が代理できた訳なの

代理なら、もう少し縁起の良い人を送つて欲しいな……

「ちなみに、心は読んでるから、お忘れなく」

「『』めんなさい」

「冗談よと彼女は笑いながら、本題を切り出した。

「また、あの争いだらけの世界に帰りたい？」

私は彼女の問いに静かに応える。

「はい、ミッドグランドに帰りたいです、私を待ってる人や助けたい人がいるから」

「そう……こんな苦しく痛い思いもしても？」

いきなり身体に激痛が走る、まともに立つていられない。

「ああああつ！」

優子さんに、斬られた脇腹と撃ち抜かれた胸が痛む…あまりの激痛に地面(?)を転がり回る。

「…」「…こんな痛みでも、あ、アタシは生きてる証になる…から…

身体の体制を何とか整えて立ち上がるが、倒れそうになる、するとルエルが倒れそうな身体を支えてくれた、以外と彼女の手は暖かかった。

「私は命を刈り採る、けど容易く刈る命なんて無いわ…」

「……」

アタシは無言で彼女を見据える。

「最後に貴女の覚悟を見せて……」

彼女の鋭い鎌の刃が首筋に迫る、しかしあたしは微動だにしない。

「恐い？」

彼女の問いに一言だけ答える。

「ええ、とっても恐い」

「そう、なら大丈夫ね、恐い物を否定しても恐怖は必ず自身に宿る、でも恐怖を恐れずそれを受け止められるなら、貴女は大丈夫ね」

彼女の姿が霞んでいく……

「忘れた、姉のイリアスが貴女に「めんなさい」と言っていたわ」

初めて彼女の笑顔を見た、正直可愛いと思つた。

「じゃあ、近いうちにまた……」

「えつ、ビハニう事？」

「姉が会こましょて言つていたわ」

ふう……安心した、彼女に会つなら随分先の方がいい。

意識が薄れて行く……

* * *

そうしてアタシは目覚める……

「ふああっ、よく寝た……」

身体の傷は治つていい、誰が手当をしてくれたのだ？

部屋は書斎の様だ、着ている服は……寝間着でベッドの上と……

「入るわね」

ドアがノックされる、この家の主だらうか？

「は、はい、どうぞ」

入ってきた人は、アタシと同い年位のツインテールの可愛い女の子だった。

これが、アタシと我が生涯の師匠【銀の魔女】との出会いである。

銀の魔女（後書き）

次回頑張ります。

新たな転生者（前書き）

ワイド・アームズから好きなガーディアンを転生者として登場させました。

誤字を修正しました。

新たな転生者

リガティ Side

綾人は何処に行つたんだ?まさか、また動物やフェイヒルフェにモコモコやモフモフにふあふあしてるので? ハア。

ボクは溜め息をついた、綾人を呼んで来いと夢舟さんに言わされて、島のあちこち探しているが、見つからない……

ザザザツと何かの気配がして、背後からボクの白い翼を触られる、ま、まさか、綾人か!?

「白い翼モフモフ成功!」

「ひやああああつ!」

いきなりの出来事に訳が解らなくなつて、少し怖かつたけど、綾人のボクの白い翼をモフモフする手つきは、それ程嫌なものでも無かつた。

「／＼／＼あ、あの……綾人、そ、そのくすぐつたいんだけ……」

「うん、業とくすぐりも入れてるからな、当然ぞ」

「綾人ーーっ! 何しとんねん!」

エレノアが助走を付けて空中飛び蹴りをする、ボクは咄嗟に空に飛

び上がり難を逃れる、綾人は寸前でエレノアの飛び蹴りをかわす、
凄い運動神経だ。

「チツ……外したか……」

「「い、今のはラ ダーキック！エレノアさん、どうして、いや何
処で覚えたんだ！？」

エレノアが何故か、胸を張り得意げに説明する。

「綾人、ルフェやフェイにこの技得意げに見せとったやろ？ソレを
うちはただ、真似しただけや、そんな事より、サテラが大変やつ、
コキュートスに襲われてる、綾人、悪いけど行つてくれへん」

流石にさつきまでのふざけた雰囲気は無い。

「よし、俺様に任せとけっ」

まるで忍者見たいに綾人の姿が搔き消える……何者なんだ綾人は……
？

「ボクも行く」

「リガティ、せやな、レイルと行つてくれるか？」

サテラに助けて貰つたから、今度はボクの番だ、久しぶりに大空を
舞い上がる。

ルヴィアSide

グライダーの偵察から、クイーン・エターナルに戻ると、『キュート』の標準的な高速艦と交戦していた、簡易ロケットがエンジンのグライダーでは余り戦力に為らないので、クイーン・エターナルに着艦する。

「ルヴィアさん、指揮は任せします」

アリシアから、艦の指揮権を受け取り、敵艦と戦闘に入る、ただし沈めはしない、生け捕りにするよ。

「目標、敵艦動力部、ただし沈めるな、航行不能にするんだつ」

「了解です、報告が遅れましたが、もうすぐアストリアさんが到着されます」

ソニアなら、アストリアを背よって、此処までくるのに余り時間は掛からないはずだ、なら目の前の【シャオム】にも手間取らないな。落としていく、しまった……

「ルヴィアさん、サテラ様がつ

「待つてつ、別の魔力を感じる……来る」

ツインテールの法衣を纏つた女の子が、サテラを水面スレスレで受け止めて、【シャオム】を爆煙で攪乱して、その場を後にする。

「よし、サテラの事は後にして、砲撃開始つ、撃て——つ——！」

ボクの号令で砲撃が始まり敵艦に弾が命中する、じつや、上手く機関部に命中したらしい。

「敵魔人が高速で接近中です！弾幕効果ありません！」

チツ、まずい、今はゴーレムやサテラ達、飛行能力をもつてゐる者達が、この船には居ない。

「ボクが甲板で迎え撃つ、皆はブリッジの防御を……」

向かって来ている、【シャオム】の動きが止まり、彼女の周りを【剣】が横切る、あれはゲート・オブ・バビロン、アストリアが間に合つたのだ。

六六六六

アストリア Side

【シャオム】にそつくりだが、多分転生者だな……彼女の雰囲気は全く別物だ、サテラの姿は見えない、彼女に殺されたか……

「貴様が、アストリアか？」

彼女が僕に話掛けてくる、まあ、合戦前に名乗るのは常識だな、此処は魔人の騎士らしく名乗るとしよう。

「そうだ、僕がアストリアだ、貴女の名前は？」

彼女は僕に対して憎悪を隠す事無く、名乗りを上げる。

「私の名は、霧島優子だつ、お前の妹サテラは私が倒した、後はお前だけだつ」

「…………」

「霧島…………優子…………何故、君が…………君は人間界に居るはず…………これは何かの罠か…………？」

「まさか、本当に優子か？」

隙を見せずに、尋ね直すもしも優子なら、かなり手強い相手だ、剣道の大会で全国優勝した彼女だ、僕も何度か試合をしたが、かなり手強かつた。

「サテラは、私に自分は真琴だと、名乗つたが、貴様も聰一郎と戯言を言つのか？」

「…………僕は聰一郎本人だと言つたら、君はどうするだつ、優子…………」

声が少し震えた、自分の恋人がまさか、転生して、今や敵味方の間柄か……

「アストリア、彼女が来ます」

「ああ、ソニア油断出来ない相手だよ、彼女は」

ソニアがレーザーブレスを放つが逸れを素早く優子は避ける、なら宝具を幾つか展開して、迎撃を……いや、少し賭けにでるか。

しかし、優子は物凄いスピードで接近してきたので、素早く剣を取り出し攻撃を防ぎ鐔せり合いになる、間違いない、この太刀筋は彼女だ……

「優子、一つだけ答えてくれ……サテラ……いや真琴はどうした！」

？」

「安心しろ、銀の魔女が連れて行つた、仕留め損なつたがな」

「そうか……なら、安心した……これで君を殺さなくて済みそうだ」

多少は、酷い奴と思われても、今は彼女を捕らえ、連中のアジトを教えて貰うしか無い、サテラが無事なら、彼女の選んだ宝具【ルルブレーカー】が役に立つはず。

ようやく、追い付いたぜっ敵艦に目掛けて加速していく、一撃で仕留め……

『綾人、あの敵は沈めずに捕獲したい、武装だけ潰してくれっ』
ルヴィアが難しい注文をしてきた……でも、無理注文をこなしてこそ、真のエースだぜっ！

「オーライっ、決めてやるぜっ」

敵艦の頭上からダイブする、ブラック・バハムートの性能を見せてやる。

対空砲火が激しいが、まだ、撃つつもりは無い……まだ、後少し……よし今だっ。

「喰らいやがれっ」

バルカン砲を砲頭やレーダーに通信室に叩き込む、これでコイツ等は外部と連絡も、反撃も出来ない。

『後は……つて、回避だっ、急いでっ』

【クイーン・エターナルが黒煙を噴いた、モニターで確認すると、】
【シャオム】みたいな女の子が、攻撃したいが……

「アストリアと戦いながら、魔法攻撃しかも、ガーヴ・フレアかよ

……

ガーヴ・フレアはたしか、魔竜王【ガーヴ】の力を借りた攻撃魔法

だ、そんな魔法を片手で撃つなんて、反則にも程があるぞつ。

* * *

? ? ? S. u d e

銀の魔女と【余り愉快では無い会話】をするために、彼女の隠れ家に行つたのだが、どうやら行き違いになつてしまつた。

それにして、コキュートスの戦艦が何故こんなところに？

「今は、その疑問は後回しだ、とにかく、この馬鹿騒ぎを辞めさせないといけない」

どうやら、騒ぎの元凶は【シャオム】似の彼女らしい、しかし彼女からは激しい偽りの憎悪しか感じない、コキュートスの艦は退却し始めている、彼女はしんがりなのだろう。

「「猫だと……いや獸人か！」」

私は彼女は気づき叫ぶ、確かに私は外見は猫の姿をした獸人だ、元は子供好きの手品師で、病氣で死に【願わくば、生まれ変わつても、手品師として子供達に笑顔を与えるたい】と願つた、そして冥王に『じゃあ、この世界に転生して見るかい？』と誘われ、その問いに答えた、姿はゲームキャラクターのダン・ダライムと言う時を司るガーディアンらしいのだが……

「さて、負の魔力に支配されているお嬢さん、もう勝敗はつきまして、これ以上は無駄な戦いになりましよう、一度退かれてはいかがですか？」

「「ふざけるのも、たいがいにしるつ、私は聰一郎と真琴の敵のアストリアを討つだけだつ！！」

あやかしの剣先を、アストリアと呼ばれた少年に向け、感情任せに怒鳴り散らす、魔力の流れからどうやら、あの剣から負の支配をされ掛けているらしい、そのほかはどうやら、強い暗示か何かだな。

「ふざけた姿で馬鹿にするな——つ！——化け猫風情がつ」

「やれやれ、仕方が有りませんね、では、ショータイムと行きましょうか」

指をパツチンと鳴らして、光の球体を彼女の周りに出現させるそして。

「ブレイク」

「「な、なにい——つ」」

まばゆい光に彼女の視界を奪う、次にトランプカードを取り出し、水平にして、彼女に放つ。

「カードショット」

「ちい」

舌打ちをしながら、彼女は、それらのカードを切り払い、素早く離脱して行く。

さて、残るはレジスタンスの新勢力【フリーダム・ウインドウ】達だけとなつた。

アストリアSide

クイーン・エターナルの被害は、飛行には問題は無いそうだ、今はマリアベルに弟子入りしている、楓と清音の二人の狐の半獣人の姉妹が、損傷ヶ所の修理をしている、ダン・ダライムさんは客間に案内して、彼と話し合いをしている。

ただ、問題は綾人だ……ダン・ダライムさんにいきなりモフモフさせて、といつていたが、僕がゲート・オブ・バビロンで大人しくさせて、結局握手で我慢してもらつた、そして運の悪い事に、飛天族のリガティとレイルの二人も犠牲になつた……でも、レイルは不満げで何故カリガティは少し顔が赤くなつていたな。

そして、よりによつて優子を彼が捕獲したら、『シャオムだよな、彼女はつ、よーしモフモフやーーつてやるぜつ』と何処で聞いた台詞を叫んでいたので、僕は笑顔で、こう答えた……

『ゲート・オブ・バビロンでダーツをしようか？綾人？』

さて、余り客人を待たせたは失礼にあたる、応接室に急ごう。

新たな転生者（後書き）

次回頑張ります。

アストリアの決意（前書き）

いろいろ迷ひつか、そのまま進めるか少し悩みましたが、バトルは次回に回しました。

アストリアの決意

サテラ・ル・ペー

部屋に入つて来たのは、アタシと同い年位の女の子だつた、ツインテールで両付きはツリ目だ。

「ツリ目は余計ね、そう言えればまだ自己紹介はまだね、私は、リレイアよ貴女のお名前は？」

「サテラ・フルトです、ええつと……貴女が【銀の魔女】さんですか？」

「そうね、私が銀の魔女何だけど、通り名なんぞいつでもいいですよ、あと心を読んだのではなく貴女の顔に書いてたから」

そうだつた……アタシは昔つから、考へてる事が丸出しになる事が、よくあつたんだ。

「サテラ、身体の具合はどうかしり? 貴女のお兄さんやお友達が来てこるのでけど」

「「お兄ちゃん達が!?」」

驚いてベッドから飛び起きた、いつの間にか服がパジャマに変わつていた。

「服は私が勝手に着替えさせる用に、使い魔のリコに命じたから、あの状態じゃあ、傷口の手当もできなかつたしね」

「――――」

「もひ……お嫁に行けないかも……」

「大丈夫 ミュは女の子の使い魔だから、安心して」

「マスター、お客様がお待ちですよ～」

小悪魔見たいな、女の子が部屋に入つて来て、主に用件を伝える、外見はグローブンサーのラミィにそつくりだ、だけど大きさは人間と同じ背丈で、なにより悪戯つ子的田付きをしてる……

「所でリレイアさん、アタシビのくらい眠つて居たのですか？」

「そうね、まる一週間かな？貴女のお兄さんには、ちゃんと使い魔を送つて説明したし、ダン・ダライムに合流して貰つて、せつき着いたばかりね」

「そうだったんだ、所で着替える服とか有りますか？こんな格好でお兄ちゃん達に会つのは……ちょっと……」

「そうね、貴女の服も傷の手当と同様に少し耐久性を強化しておいたから」

「強化つてどのくらいですか？」

人差し指を可愛く立てて彼女はとんでもない事を言い出した。

「うーんとーね、戦艦の主砲弾を直撃しても大丈夫な位ね

「

「直撃なんか……したく有りません……よ

何だか、どつと疲れが溢れ出した気がした……

アストリアの回想

アストリア Side

ダン・ダライムさんの案内で銀の魔女の隠れ家に無事到着した、ダン・ダライムさんは今、綾人と話をしている、そのほとんどが毛並みの手入れの事とか、マタタビはどうだ?とかだった、しかも途中からルヴィアも参加して肉球とか握手ついでにブーブーする始末だ。

「まあ、本人も怒つていないし、後あの三人はびびやら氣が合つ見たいだな」

「アストリア様、何か?」

「うん、ちょっと考え方をね……」

アリシアが怪訝な表示をする、サテラの事はリレイアさんの使い魔の手紙で大体の事情は解つてる

「間もなくか、よし機関減速しろ、これより本艦は銀の魔女の隠れ家に上陸する」

「はい、機関減速用意、総員上陸準備、配置に着け」

魔女の隠れ家はちょっとした無人島だ、船を沖に停泊させ、ボートで島に向かう事にした、レスターは僕の隣に来ている、今回はソード・ブレーカーはベルアート・チエだけに任せて同行させた、彼も心配してるから、自分の仕事に集中出来そうも無いから連れて来たんだ。

「あいつ、心配させやがって……」

「アストリアはどうしたんだ?」

「俺なら大丈夫です、アストリアさん」

浜辺に上陸して、綾人やレスターの会話をしながら辺りを見渡す、白い砂浜と奥に森が見えた。

「アストリア様ですね?私はミューと言つ使い魔です、我が主の命によりお迎えに上がりました」

間もなくして、ミューと名乗る使い魔が、隠れ家案内してくれた。

「ミーの森は何だか凄い魔力を感じるね?」

「はい、たまに厄介なお客様がいらっしゃいますので、森が結界になつております、私から逸れたらお命の保証は有りませんので、ご注意をしてください」

いきなりバッドエンドフラグか……何となくそんな雰囲気が森全体から伝わって来る。

五時間位歩いたかな、森の出口が見えて来た、森を出ると集落が見えて来たが……人の姿は見えない、いや、僕達を警戒して姿を建物の中に隠している。

「隠れてるのは、獣人や半獣人の子供達だぜ、アストリア」

綾人が説明してくれた、彼が言つならそうなんだろ、しかしこれまで獣人に敏感な奴は始めてだ。

「綾人さん、モフモフは……」

「分かつてさ、特に怯えてたり、恐がつてゐる子供達にはモフモフはしないさ、俺様は子供達に好かれる奴なんだぜ」

【半獣人】や【魔人】と言つた単語は使つていい、恐らく子供達をこれ以上怖がらせ無い様にする為の彼なりの配慮だな。

「アストリア様、マスターは、あの丘の上のお屋敷にお住まいです」

ミユが詳しく教えてくれた、確かに丘の上に古びた洋館が建つてゐる、隠れ家と言うより屋敷だな。

やがて屋敷の入口の前まで来た、すると扉が勝手に開く。

「アストリア様ですね？」

「はい、はじめまして銀の魔女、貴女の手紙を受け取り、貴女の隠れ家に参上致しました、事前にご連絡を入れなかつた非礼をお詫び致します」

くいえ、その事より、貴方の妹さんのサテラさんの事で私がお呼びしたのですから、逸れより立ち話も何ですから中にお入り下さい

そう促され屋敷に入った。

そして、僕は妹と無事再会した。

サテラ.S.ue

アタシは今お兄ちゃんの前に立つてゐる……だけビ、お兄ちゃんは本気で怒つてゐる……

「ハコ、皆さんを別室にお連れしましょう……」

リレイアさんは私達の雰囲気を察して、皆を連れていく、レスターがアタシを心配そうに見ていたがお兄ちゃんに、一言【済まない、これは僕達兄妹の問題だ……】そう言つた、反論は許さない空氣にレスターは寂しそうに……いや残念そうに部屋を出て行つた。

「何故……僕が怒つてるか分かるな？ 真琴」

「うん……『めんなさいお兄ちゃん……』

この世界に来て始めて自分の名前で呼ばれた、そして、頬に強い痛みを感じた、お兄ちゃんが平手で私の頬を叩いた。

「僕や正樹がどれだけ心配したと思つてるんだつー。正樹はお前を探しに行こうとしたんだつ、逸れに正樹はなつ、お前の無事を知つてつ、一人泣いていたんだぞつー。」

レスター……いや、正樹君が……

「…………めん…………なむー」

涙で目が霞んできた…………するとお兄ちゃんは、そつとアタシを抱きしめて、静かに咳く……

「もう一度とこんな無茶は絶対にするな…………約束出来るか?」

「うん、約束する…………」

頭の後ろを優しく撫でてくれた、優子さんをお兄ちゃんや皆で、アイツ等から取り返すんだ、でも優子はかなりの強敵だ。

「銀の魔女にお前の事を頼むか?」

「えつ…………それって、どういう事?」

その時ドアをノックする音がした。

「アストリア様、サテラ様、もつ、よろしいでしょつか?」

「はい、どうぞ、お待たせしました」

「アストリア様、サテラ様、マスターが、お一人にお話が有るそつです」

「？」

「ミコ」に案内され、応接室に向かつた、応接室は綺麗に掃除されていて、とても魔女の隠れ家とは思えなかつた。

「わい、調子はどう? サテリスさん」

「は、はい、リレイアさんのお蔭様でもう大丈夫です」

「あの、妹がお世話になりありがと「わい」しました、いきなりで失礼ですが妹を弟子にして貰えないでしょうか?」

リレイアさんはお兄ちゃんの提案に、残念そうな表情をする。

「申し訳ありません、弟子は一度ととのつもつはありません……」

「「……」」

その場の空気が重くなつた……

「しかし、妹さんの身体の魔力の流れは、気になります、よく、あんな不安定な状態でいましたね」

私が不安定な状態……?

「まさか、自分で気付いていない?」

「はい」

机に片手を置き、ため息を付くりレイアさん、あのー、詳しく説明くれないと訳がさっぱり解らないですけどー。

「「サテラさんっ、貴女それでも、魔人でしょ? 今の貴女は魔力の流れが目茶苦茶で、まともに機能していない機械と同じです! これじゃ折角の切り札の全てが宝の持ち腐れだわつ」」

リレイアさんのあまりの剣幕に圧倒され、ぽかーんとなつた……ツリ目の知的な美人だと、思つていたら、怒ると思つてている事を全部出してしまつ人らしい……

「貴女の弟子は認めませんが、魔力の流れの乱れを正さなければ貴女は一生本来の能力を活かせないまま終わるでしょう……」

「え? と、どの位酷い状態何ですか?」

「人間界で言う所のバラバラのルービックキューブ並よ、魔力乱れは今すぐ治しに掛かるから、他の方達は別室で待つていて下さい」

有無を言わさない、リレイアさんの雰囲気に全員が圧倒された、迫力だけならこの場で彼女に勝てる人はいないだろう、お兄ちゃん達が部屋を出て行つて、私とリレイアさんの二人だけになる。

「じゃあ、工房の魔法陣を使いましょう、後かなり気持ち悪なるから、それなりに覚悟して」

「はい……努力します……」

そして、アタシはリレイアさんの工房に連れて行かれた。

レスター Side

銀の魔女こと、リレイアさんの屋敷から、集落に出掛ける、あの屋敷に居ても、俺に出来る事は無いからだ、集落の広場で、ダン・ダライムさんと綾人が半獣人や獣人の子供達に手品を披露していた。

「一人とも子供達が好きなんだな」

「レスター、少し話しをしようか?」

アストリアさんが、話し掛けて来た、俺は頷くと人気の無い場所森の中で彼と話しをする事にした。

「此処なら、邪魔は入らないな……」

「ア……いえ、聰一郎さん、話とは何ですか?」

俺は本題を切り出した、あまり時間を掛けても面白く無い話題だと考えたからだ。

「真琴の事を君が支えて欲しいんだ……」

「えつ……」

予想外の答えが返つて来た事に正直驚いた。

「僕は優子を連中から取り返す、だけど、またサテラが無茶をした

「……」

「……聰一郎さん、約束して下さい、貴方も無茶はしないと……」

「……約束しよう、まるで死亡フラグだが、僕は死ねないな、彼女の強さは僕が一番よく知っている、彼女を取り返すには皆の協力が必要だな」

少し不安を感じたが、多分大丈夫だろう、しかし戦闘データ見る限り、優子はかなりチートだぞ、そう考えいたら、ミュウがやって来た。

「アストリア様、レスター様、マスターと皆さんがお待ちしております」

「ああ、ありがとうございます、直ぐに行きます」

「ミュウ、ミユウ様」

俺達は屋敷へと向かった。

リレイアSide

「さて、皆集まつた所で、この前の物騒な娘の居場所を教えるわね、此処から西に一日位で行ける無人島にいるそつよ」

船のダメージが酷くて、まだ、この辺りで居てくれたのは幸いだと

思つ、もし連中のアジトにでも自力で引き上げられたら、いくら私でも手出しは出来ない。

「どうして解つたんだ？」

「使い魔を総動員して、探り当てたの」

「他の連中とは考えられないのか？例えば海賊とか」

「じゃあ、これを見て、【彼女】でしょ？」

使い魔が送つて来た【映像】に私と戦つた女性が、部下らしい兵隊と会話している姿が写つている。

「間違い無い……優子さんだ……」

サテラさんが言つのだから、間違いない。

「じゃあ、私から提案ね、まず彼女の動きは、ダン・ダライムさんの【システム・クロノス】で封じて、あの魔剣は綾人君が破壊、そしてサテラが【ルール・ブレーカー】で彼女に掛かつてる呪いの解除が主な作戦ね」

皆が頷き掛けた時、アストリア君が異議を唱える、その場の全員が彼を見る。

「僕は反対だ、確かにリレイアさんの戦い方なら、彼女を捕らえ事も出来るだろ、しかし、システム・クロノスではどの位のダメージを与えるか、正直解らないし、ダン・ダライムさんの事を向こうが知つていたら、失敗するかも知れない、なら、レスターが援護

で綾人が魔剣の破壊に、彼女の呪いはサテラに任せ、彼女の相手は僕がする」

アストリア君の目を見ると強い【意思】が伝わって来る、やれやれ……」

「……」

「分かったわ、私も協力はするけど、無理はしないでね、アストリア君」

彼は穏やかな表情を浮かべて、一言だけ。

「ええ、無茶はしても無理はしません、彼女の太刀筋はよく知りますから」

と一言だけ答えた、そして私も協力を申し出した、理由はほって置けない兄妹だから。

アストリアの決意（後書き）

次回頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7166v/>

空中海賊物語り

2012年1月12日18時57分発行